

---

# GATE

杉 御零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GATE

### 【Zコード】

Z5528Y

### 【作者名】

杉 御零

### 【あらすじ】

普通ではない力を持つていた富野 修治は、ある日“魔物”に襲われる。そこを美少女に助けられ、GSSCという組織の存在を知る。修治は自分の力が“魔物”を惹き付ける事を知られ、組織に勧誘されるも、それに応えられない。だがついに、修治の学校にゲートが出現し。。。 戦闘パート、日常パートあり。基本、チート主人公です。ハーレム予定。不定期更新です。

## 魔物襲撃　え、マジで？

キー口、キー口、キー口。

午後10時過ぎ公園。只今俺は「コンビニの帰りでなんとなくブランコを漕いでいる。

暗い公園に響く音が地味に怖い。

俺の名前は宮野 修治。みやの しゅうじ高校1年生で近くの天野岩屋高校あまのいわやに通っている。通っている身ながら凄い名前の高校だと思う。

と、モノローグ1人語りに入りかかる。

ふう、危ない所だつた。

またなんとなく辺りを見渡す。

すると、現実に意識が復帰した事で目の前の異変に気付く。

俺の正面のあたりの闇が渦巻いていた。

よく見ようと目を凝らすが暗くてよく見えない。

そうしている間も闇は渦巻きながら大きくなつていた。

俺の本能はガンガン警鐘を鳴らしている。

が、やはり好奇心の方が上回った。  
やつぱり氣になるよな、こういうの。

そんなんで、観察する事にした。

しかし、闇は予想以上に大きくなつた。

最初、地面から膝くらいまでだつたのが、既に3m程にまでなつていた。

どこまでテカくなるんだ？

もう帰ろうかなー。そう思い始めた時だった。

闇の中から何かが現れた。

それは始めはぼんやりとした輪郭だけだった。だが、次第にくつきりとしてきて、最終的にそこに現れたのは巨大な門だった。

2m強の巨大な門。

公園にあるにはあまりに異質な物だった。

数秒間固まつた。

無理もないと思う。言い訳をする訳ではないが、この状況で冷静な奴の方がおかしい。だから俺がフリーズしてしまったのも仕方がない筈だ。

たとえそのせいでの次に起こった事に対処出来なかつたとしても。

ギイイ

門が開いた。

それに——ヤバい、なんか魔物っぽいのがwww　じゃなくてわらわら湧いて出て來た！

魔物達はすごく強そうだ。動物っぽい奴もいるが、明らかにこの世界の生物ではない異形も見受けられる。

「マmand、逃げる。

しかし、回り込まれてしまつた！

コマンド、戦う。しかないか、嫌だけど。

「グルオツ！」

イノシシの様な魔物が吠えて突っ込んできた。イノシシだから突進つて、愚直だな。

さて、どうするか。

相手はイノシシといつても化け物だ。突進も見たところ最低でも100km/hくらい速度がでている。まともに食らつたらマズい。

しようがない、奥の手を使うか。出来れば使いたくなかったんだが、今はそうも言つてられまい。

「プロテクト！」

俺がそう発声すると、青白い盾が現れて俺を守る。  
突っ込んできたイノシシは頭をぶつけて砕けて死んだ。 まず  
一体？

まあ、イノシシの事は兎も角、この障壁精製が俺の能力だ。

門の方を見やると更に魔物達が湧いてきていた。  
俺は魔物達に向き直つて見据える。

「っしゃあ、どんどん掛かつてこいやつ！」

# 魔の群 一匹見たら百匹いると思え！？

20分後。

結局、200匹程殺した所で俺は勝てないと悟った。

## 何故か二つて?

と云ふ事で現在、能力でドーム状の防護壁を造って籠城中。

「この壁は滅多な事では壊れないと思つて居る。

壊れないとは分かっていてはいるが、分かっていても、  
壁に張り付いてくる魔物を見ていると、生きた心地がしない。  
俺の障壁は半透明だから、向こう側が見えるのだ。

「ハヤー井戸、食うのやめよいかな。

醜惡な魔物の世いで食欲は失せていた

更に10分後。

「生きて帰れんのかな？」

不安になつてきた。

死する。  
障壁は破られない筈。  
でも、ずっと閉じこもっていたら恐らく餓

それまでに助けが来るか？

兎も角、何時まで籠城するかは分からないが、食料はコンビニ弁当一つ。飲み物は家にあるからと買わなかつた。  
うーん、喉渴いた。

それより、暇だ。

食料問題とか考えて氣を紛らわそうとしてみたが喉が渴いただけだつた。

そろそろ本気で暇になつてきた。

よつて

脱出を試みる事にした。

突然だが、ここで俺の障壁について少し説明をする。

障壁は俺と相対的な位置に出現し、どんな力が加わつても動かない。  
だが逆に、俺が動けば相対的に障壁も動く。

そこで俺は思いついた。

障壁ごと駆け抜け、魔物を搔き分けて逃げよう！

脱出作戦決行！

更に更に10分後。

結論から言うと駄目だった。

俺がいくら逃げても、足の速い、もしくは飛べる魔物が追いすが

つてきて魔物の群れから抜け出せない。

それに、今もそうだが、何百匹という魔物が障壁に張り付いていて周りが見えづらい。結果、沢山走ったのも公園の中をぐるぐるしただけだった。

「マジで無理かも。、 つて、あれ？」

軽く諦めムードになりかけた時だった。

俺の目が信じられない光景を捉えた。

少女が1人、公園の入り口に立っていた。それも、かなりの美少女。今は美少女とか気にしている場合じゃないか。

髪は水色のショートヘアで、おとなしそうな整った顔に眼鏡をかけた、線の細い華奢な体型の少女だ。

と、つい少女の観察をしてしまったが、俺はそこで重大な、しかし至極当然の事に気がついた。

あの娘危なくね？絶対魔物に狙われると思う。

すると

「グララララ！」

「キシャー！」

「ブモオウ！」

俺が恐れた通り、魔物達が少女に気づいてしまった。そして案の定、魔物達は少女に襲いかかっていった。

少女の姿が魔物の群れに埋もれて見えなくなる。俺は最悪の状況を予想し、思わず目を閉じた。

しかし直後、俺の予想は見事に裏切られた。それも、予想だにしない方向に。

轟音が鳴り響いた。

といふが今、魔物が出て来り、なしでな

恐る恐る目を開く

そこに1人立つている少女。

この事からわかるのはただ1つの事実

「どんだけ強えんだよ

思わず驚きが口からもれてしまつ。

そろ程圧倒的な、理不尽な強さだった。

少女の攻撃はほとんどの魔物を消し去らせていました。

らざいなくなつていた。

少し恐ろしい想像に軽く身震いする。

そんな俺の事に気付いているのかいないのか、少女は俺に見向き

もせず、真っ直ぐ門に体を向けた。

「ゲート、補足。目標、破壊します」

少女が喋った。

声も可愛え！ じゃなくて、ゲートって言つたな。やつぱりあれは門なのか。

「攻撃、開始」

少女は、そう言い右の手の平を突き出す。

直後、

ドガーン！ズドオン！ズジャー！

俺の拙いボキヤブラリーで言つとそんな感じに、少女の手の平からビームが何発も放たれた。

ビームは俺の障壁に似た色をしていたが、防護的な俺の能力と比べると随分暴力的だ。

先ほども同じ様な攻撃を放つたのだろう。魔物達を一撃で消し去つたのも、これを見れば納得出来る。

そのビームをもろに受けた門、ゲートといったか。まあ、そのゲートの方は、勿論耐えられる訳もなく消し飛んだ。

周りを見ると、何とか生き残っていた魔物達が塵になつて消えていった。

ゲートが無いと生きていられないのだろう。

「破壊、完了しました」

少女はそう言った。恐らく先ほどからのも念め、マイクか何かで報告してくるのだ。「

かつこじー。それに美少女（そらそらじゅうじーか？）。

その様な事を考えて見てみると、少女はこちりに歩いてきた。

「

少女は俺の田の前に来ると、じーーっと俺の顔を覗き込んできた。

俺は何か言おうと試みる。が、何と言えば良いのか分からぬ。じゅじょべ。

。

そうだ。

とりあえず、まずは助けて貰つたお礼だ！

「ありがとうな

「

しかし、少女は何も言わない。  
これでは間が持たない。

どうしようかと考えていた時だった。

ブロロロロロロローラー、キイ。

公園の入り口近くに黒いボックスカーが止まつた。少女は車の方を見て、再びこちらを向いた。そしてようやく口を開いた。

「 つこしてきて下わー」

「 へ?」

いきなり言われた事が理解出来ず、一瞬戸惑つ。すると少女は俺の手を引いて歩き出した。

「 えつ? ちよつ、 めつ」

強引に引っ張られ、ボックスカーの近くまで来る。

「 待つていて下さー」

やつひと少女は車の中にいた人と何か話しあつた。しばりすると、少女は車のドアを開けた。

「 さあ、 早く」

乗れといつ事か?

躊躇していると、再び手を引かれて車の中に乗せられそうになる。

「 俺、 帰れんなきや いけないから」

仕方がないので、そう言つて逃げようとしたのだが

「つ！」

少女がその細い腕からは考えられない様な力で俺の手を掴んでいて離れない。

「たゞすけて〜〜

結局、車に乗せられてしまった。

## 特殊部隊GSSSC 秘密組織って本当にあるんだ！？

数十分後、どこかのビルについた。  
見た限りは変わった所はない。よくある普通のオフィスビルの様だ。

「ここは？」

「ゲート破壊工作特殊部隊GSSSC、日本支部本部です」

「はい？ ゲート 破壊？ 特殊部隊？ えええ。  
なにそれ！？」

俺、混乱の極み。

無駄に長い名前の、よく分からぬ場所に、理由も知らされず連れてこられたこの状況。

なにこれ！？

俺の混乱をよそに、少女はビルへと入っていく。  
もうここまで来たら行くしかないよな。  
俺も覚悟を決める事にした。

俺は少女に続いて自動ドアを通りビルへと入る。  
と、そこで、少女に声をかける者がいた。

「あっ、ＺＯ・Ｚ。任務は終わっ、って、え？ 修治！？」

ところが、話の途中でいきなり俺の名前が出てきた。

俺は反射的に顔を上げ、相手の顔を見る。

つて、光？

そこに居たのは俺の幼なじみの少女、朝霧

光だつた。

光とは小学校入学当初からの付き合いでけつこう仲がいい。

外見的特徴を言つと、髪型は腰まで伸びた黒髪、顔立ちは大和撫子といつた様で和風の美少女だ。

そこまでは良かつた。

そこまでは俺の知つてゐるいつもの光だ。

だが、目の前にいる光は何故か巫女服を着ていた。

何故に巫女服？それにここ神社じゃないし。

まあ可愛いからいいか。可愛いは正義！

そう言つて許せる程に、光に巫女服は似合つていた。

♪ 135535 — 4461 ♪

話が脱線した。

それより、何で光がここに？

「何で修治がここにいるの！？」

思つていたのと同じ事を言われた。

まあ、この状況なら誰だつてそう言つだらうな。

それにもしても、大して動じてない俺すごくね？

短時間に沢山驚いたせいで驚きに対して免疫が出来てゐるのかもな。だからもう、光がここにいるという事実を受け入れるだけだ。

だが、光はそうはいかなかつたらしい。

「どうしていとなの、Ｚｏ・Ｚ！？」

少女に對して凄い剣幕で問う。

しかし、それに対し少女は少しも表情を変えずに答える。

「作戦中にこの方から強力な魔力を感知しましたので、隊長に報告するつもりで連れて来ました。 では、急ぎますので」

そう言い、少女はスタスターとエレベーターの方へ歩いていった。

それをぽけーっと見ていると光が俺に言つた。

「ほりつ、あんたも行くのよー。話は明日聞くから」

「えつ？ああ 分かつた」

光に言われて氣付いた。

俺も行くんじゃないか。

少女の後を追いかけ、俺も急いでエレベーターの方へ向かつ。

少女について行くと、扉からして他の部屋とは違つと分かる部屋の前に着いた。

中には恐らく組織内でもけつこつ位の高い人だろう。

こんこん。

少女が扉をノックする。

「ビバゾ」

中から返事があった。

誰なのか聞かずに入室を許可するとは、よほど組織内の人達を信頼してゐるんだな。

もしくは監視カメラで見てゐるか。

部屋に入ると、中は社長室の様な雰囲気（あくまでも“雰囲気”だ。実際に社長室なんて見たことないからな）になつていてまたまた社長の様な雰囲気の人が座つていた。

その人は20代くらいの男で、イメージ的にはやはり手青年実業家といった感じだ。

男に向けて少女が話し掛ける。

「対魔法生物殲滅兵器アンドロイドーネ・フ、帰還しました」

「アンドロイド?まあいい、この事については後で聞いてみるとよい。」

「お帰り、ノ。それと そちらの方は?」

男が少女に言葉を返す、更に俺の方を見て問い合わせる。

「Jさんはきちんと挨拶しなければ。」

「Jさんは、富野 修治と申します」

キリッと、格好良く言えた筈。

それに対してもの反応は

「はい、こんばんは。 ついの職員じゃないよね？」

微妙だあ——！

凄い微妙な反応帰つてきた！  
がつくり。意氣消沈。

「作戦中にこの方から強力な魔力を感知しましたので、隊長に報告するため連れて来ました」

俺の落ち込みはいざ知らず、少女は男（隊長らしい）。これからはそう呼ぶよつにじよつ（元光にしたのと同じ報告）をした。

「やうか、ふむ」

隊長はそれを聞き、少し考える。

そして、真つ直ぐに俺を見てきた。

その表情は真面目そのもので、場の雰囲気が一気にかたくなつた。  
重苦しい沈黙。

そして男が口を開いた。

「面倒くさい説明は省いて单刀直入に用件を言わせてもらひつよ、富

野 修治君

「いや、説明はして下さー」

「

沈黙。

隊長は露骨に嫌そうな顔をした。

俺は悪くないよな？

誰だつて説明なしで判断などできない。説明を求めるのは当然の事だ。

それに、隊長、面倒くさいって言つてたよな？ただのわがままじやねえかっ！なんか俺の方がわがまま言つたみたいになつてるけど。

「しょうがないな、じゃあまづは説明から始めるよ」

今、しょうがないって言つたよ。ビルまで面倒くさがりなんだよ  
この人。

「ん~、まづこのビルだけじ、ゲート破壊工作特殊部隊GSSSC日本支部本部として使わせてもらつてる」

「これはさつき少女からも聞いた事だ。

「ところで、Ｚｏ・フが連れて來たつて事は君も何か力を持ついるのかな？」

力つていつたら、障壁精製のことだろ？。

「はい」

答えるが隊長に反応は特にない。  
俺がYesと答えると分かつっていたのだろう。

「それで、君も見たんじゃないかな、大きな門と魔物、もしくは魔物だけでも」

「見ました」

「どうか、良く生きていたね。あの位の大きな門になると出て来る魔物も強いからうちの戦闘員でも3人位で壊すのに」

「マジ？」

「実はそんなヤバい状況だつたのか。」

「兎も角、と、隊長は話を続ける。」

「我々は、その門と魔物達を殲滅する事を仕事、いや、責務としている」

「どうか、この組織があるから今まで俺達一般人は被害も無く、知りさえしなかつたのか。」

しかし 、と、そこで少し悔しそうに隊長が話しだした。

「しかし 我々は未だ、魔物の行動目的やゲートの出現場所など多くの事が分かっていない」

「隊長はそこで一悶話すのを止め、言いづらそうに続ける。」

「ただ、最近になつて分かつてきただが、魔物は君の様に強い多くの魔力を持つた人に惹かれている事は分かつていてる。だからこれからも君の周りではゲートがひらくだろう」

これで大体話が読めてきた。

ゲートの開く場所をある程度把握し、ゲートと魔物を殲滅するため俺にこのGURUHという組織に入れといつもりだろ。

とりあえず今は先手を打つておく事にするか。

「だから、俺にもこの組織に入れと？」

「そう言つと、隊長は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに元に戻つた。

「最近の子は頭の回転が早いねえ、話が早くて助かるよ。ここ最近、魔物達をが活発化してきてね、我々としても戦力は多い方がいいんだ」

正直言つて迷う。

戦えるのに戦わないのは怠慢だろうか。

俺も人類を守るというのは憧れる。だが、これは現実だ。戦いの最中で死ぬことも有り得る。

俺は

「考え方を下さい」

決断はできなかつた。

この場で簡単には決められない。

すると隊長は少しがつかりした顔をした。

「どうか、やはり今すぐつてのは無理か。じっくり考えてくれ。じやあしばらく、護衛を兼ねた監視役を派遣しよつ

「監視役？」

「ああ、今後君の言動には少し制限がつぶ。」この事やゲート、魔物の事は喋つてはならない」

思えば当然の事だ。機密組織なんだし。

それにしても、監視役とはな。誰だろ？、光かな？

「話は以上だよ。遅くまで済まなかつたな。N.O.・F.、彼を送つて行つてやつてくれ」

「了解しました」

俺は少女の後をついてビルを後にした。

ビルから出ると少女はこいつらを振り向きもせず、スタスタと歩いていってしまう。

俺も慌てて追いかける。

こうして俺+同行者は家路についた。

スタスタスタスタ。

少女はただひたすら歩いている。

GUUCHIのビルからこれまでずっとこの調子で、無言で歩いてきた。

「正直言つて氣まずい。  
何か話題が欲しい。」

「 なあ

とりあえず話し掛けでみる。

英語の先生が言つていたが、海外旅行をしたらとりあえず外国人に話し掛けでみるべきらしい。いざ話せば、話す事は後から幾らでも浮かんでくるという事らしい。

しかし、

「何ですか？」

「あ、あのさ、あの 」

何も浮かばなかつた。

「 ？何でしょう

少女が不思議そうに聞いてきた。  
ええつと、話題話題。

あ、そうだ。

「俺、本部のビルの場所とか見たけど、帰り日図とかしなくていいのか？」

ふう、なんとか思いついたぜ話題。

「何故 ですか？」

「いや、口外したらまずいだろ？」

俺がそう言つと少女は小首を傾げ（可愛えー）聞いてくる。

「口外するんですか？」

そうへるか。

「いや、しないけど

「なら大丈夫でしょ？それに

何この無償の信頼！

嬉しいけど、こんなにあつさつ信頼されちゃつていいのか？

あれ、でも今、それについて言つてたよな。

嫌な予感。

恐る恐る聞いてみる。

「それに、何？」

「それに 監視役も付いていますから

ガツデューム！

信頼されてねえ！

それに怖えよ！新手の脅しかつ！

スタスタスタスタ。

そしてまた無言。

この空気なんか嫌だ。

スタスタスタスタ。

何か話題 は、もついいか。

スタスタスタスタ。

あ、家の近くだ。

「家の近くまで来たからもうこいよ、ありがとつ  
「そうですか、分かりました。では、某はこれで」  
「それがし ん? 某と言つたか。古風な一人称だな。  
そういうや、この娘の名前知らないや。

「ちょっと待つた」

帰らうとする少女を呼び止める。

「やつにいえば自己紹介してなかつたと思つてさ、俺の名前は宮野  
修治」

「知つています。先程、隊長に名乗つていたのを聞きました」

知つているのなら形式的なものとして受けとめてくれれば良かつ  
たんだが。

「君の名前は?」

そう聞くと少女は一瞬、迷う様な、躊躇う様な素振りを見せ、そ  
して俺の問いに答えた。

「某はぬを持つません」

## 特殊部隊GSSSC 秘密組織って本当にあるんだー? (後書き)

1話、2話が短かったのに対し、3話は少し長めになりました。  
4話は少し短めになる予定です。

## 機械少女と名前 名付け親は俺！？

「某は名を持ちません」

その言葉の意味をすぐには理解できなかつた。

名前を持たない人などいない筈だ。そもそも名前が無ければ戸籍登録さえできない。

「それってどういっ

俺がなんとか疑問を口にすると少女は答えた。

「某は人ではないので名を持ちません。機体名ならあります。機体名は“対魔法生物殲滅兵器アンドロイドーネ・フ”です」

少女が更に口にした事は俺の疑問を増やしただけだった。  
どういう事だ？全く理解できない。

「とりあえず聞くか。  
考えても分からない。」

「人じゃないとか、機体名とか、どういっ事だ」

「それは

少女は自分について語り出した。

話は1時間程続いた。外で立ち話するには少々長い時間だった。

聞いた話を要約する。

今もあまり居ないが、元々GSSCにはほとんど戦闘員が居なかつた。

そこで出た改善案の一つに、ロボットに戦わせるというものがあつた。

そして、<sup>プロトタイプ</sup>試作機のN.O.・1、N.O.・2が作られた。それらはあくまでも試験用で、実戦には向かなかつた。

その後戦闘に特化させたN.O.・3、N.O.・4が作られた。それらは普通の相手ならば、単騎で一個師団を10分で壊滅されられる程の実力があつた。しかし、魔物には勝てなかつた。

そして、研究員達が自棄になつて極限まで強化したN.O.・5。その作成の為に兵器に関する国際禁止条約の7割を特例で無効化したそれは、単騎で大陸1つ滅ぼすとさえ言われた。

人類の技術の粋たるN.O.・5は、ゲートを2つ破壊する事に成功した。しかし、3つ目を破壊する際に強い魔物が現れ、激闘の末に破壊された。

その時の魔物を見て、司令部の人々が口を揃えて「 悪魔かつ！」と言つたらしい。

悪魔じやなくて魔物なんだけどな。

これ以上のものは作れないと言われたN.O.・5でさえ勝てなかつた為、ロボットでは魔物には勝てないと考えられ始めた。そのうち、ロボット計画自体が諦められかけていた。

そんな時だつた。“魔力”の発生方法が発見されたのは。

これまでのデータから、魔物に有効打を与えられるのは魔力を使った攻撃だけだと分かつている。

そして当初は魔力を持つのは人間だけで、能力を使い戦闘ができるのは強く多い魔力を持つ者だとされていた。

後半はあつてはいる。だが、前半は違つた。魔力を持つのは“人間”に限らず“心を持ったもの”だという事が後から分かつたのだ。

そこからは早かつた。僅か1ヶ月で“心を持つ”人工知能が開発された。

それはすぐさま軽量化され、ロボットに搭載された。ロボットは感情面の関係で人型となつた。

こうして、歴史上初の心を持つロボットが作られた。それがN<sub>0</sub>・6。

凄まじい発明だったが、N<sub>0</sub>・6は軍事最高機密として公開されなかつた。

N<sub>0</sub>・6はロボットにして“心”を手に入れた。

だが、最初は能力を使えなかつた。

魔力が少な過ぎたのだ。

結果としてN<sub>0</sub>・6は改良を施され、人為的に魔力量を増やされる事で能力を使えるようになつた。

そして、N<sub>0</sub>・6のデータを元に戦闘用に作られたのがN<sub>0</sub>・7。この少女だという。

これで謎が解けた。

隊長と話した時アンドロイドとか言つていた理由も、ようやく分

かつた。

それにしても、にわかには信じがたい話だ。  
だが、幾ら信じがたくともこれが真実なのだろう。

それと、少し気になつた事があつた。

「なあ、俺達と同じで心があつて感情があるんだろ? だつたりと、  
名前が無くていいのか? 欲しくなんないの?」

正直、失礼な質問だと思う。だけど俺は、思つた疑問をそのまま  
伝えたかつた。

そして、正直な気持ちを答えて欲しい。

すると少女は、少し考えるよつにした後、俺の問いに答えた。

「分かりません。心はあります。感情もあります。ですが、それが  
どの様なものが分からぬのです。だから某は、名前が欲しいのか  
欲しくないのか分かりません」

自分の気持ちが分からぬ、か。

それはどんな事だろう?

嬉しくても嬉しいと分からぬ。頬を伝う涙の訳も分からぬ。

俺も自分の事ではないからほつきりとは言えないが、それはきつ  
と寂しい事だらう。

できる事なら、この少女に“気持ち”を知つてもらいたい。沢山  
喜んで、沢山悲しんで欲しい。まあ、悲しみは少ない方が良いが。

決めた。

俺はこの感情を知らない少女に本当の“心”を知つてもらひ。

そのために今できる事をしよう。

「そうか。 でも多分、名前があつたら嬉しいと思つ。別に嫌ではないだろ?」

「はい。嫌では ないと思います。もしかしたら、嬉しいかもしれません」

「じゃあさ、俺が考えてやるよ、名前。いい?」

「貴殿<sup>あなた</sup>が名前を? 変なのは嫌ですよ?」

「ああ、任せる」

名前か どんなのが良いだろ? つか。

そうだ、ノ。・フだから

「ナナつてのはどうだ? ノ。・フだからナナ。そのまんま使えるかな?」

「 ナナ。某の 名?」

少し不安そうに確認をとつてくれる。

俺は出来るだけ頼もしそうに一言答える。

「ああ」

俺がそう肯定すると、ナナは、花の様な とまではいかないが 確かな微笑みを浮かべた。

感情が分からぬとか言ってたけど、十分笑えるじやん。

「じゃあ、またな。ナナ」

「はいー。」

名前で呼ぶと更に嬉しそうにして帰つていつた。

そして俺も帰路へついた。

♪ 135431 — 4461 ♪

## 死を呼ぶ力 非情な現実と確かな覚悟

あの日から数日、何もなかつたかの様に普通の日が続いた。

光に教室で会つた時に巫女服について聞こつとしたのだが、「なあ、この間の巫女ふ<sup>ブレッシャー</sup>」と言つた所でこの世の者とは思えないほどの圧力を放ちつつ睨まれたので聞くのは止めた。  
いや、あれはマジで怖かった。

そして、あつという間に2週間が過ぎた。

あの日からちょうど2週間と1日たつた今日。  
現実、俺は寝坊して遅刻しそうになつていて。  
とはいへ、ギリギリだが一応学校には着いている。あとはH Rま<sup>ホームルーム</sup>でに教室に滑り込めばOKだ。

という訳で教室へと急ぐ。  
と、そこで異変に気づいた。

教室の方がやけに騒がしい。

学校なのだから多少騒がしくともおかしくはない。  
だが、今日の“騒がしさ”は何時もどこか違つた。

何とも言えない不安に搔き立てられ、教室へ向かう足が早まる。  
教室へと近づくにつれ喧騒は大きくなつていく。

そして、俺の耳が悲鳴を捉えた。

ふざけた悲鳴ではない。心の底から恐怖した様な、そんな悲鳴だ。

これはただ事では無い。

そう判断し、教室の方へと駆けだした。

いや、駆けだそうとした。

しかしすぐに俺は足を止めた。

何故なら、教室の方から大量の生徒が一気に走ってきたからだ。

あれは、逃げているのか？

沢山のクラスメイトが駆けてくる。

「おいっ！何が起きた！？」

叫ぶ様にして問い合わせる。

そうでもしないとの状況では聞こえない。

「ばっ、化け物が出て、それでっ！逃げ遅れた奴をつ！お前も、早く逃げろ！」

クラスメイトの加藤という男が答えてくれた。そしてすぐに脱兎のごとく駆けて逃げていく。

今、加藤が言った“化け物”といふ言葉。思い当たるのは一つしかない。

恐らくは、

魔物の事だろ。

「ちくしょうつー！」

思わず悪態をつく。

何で、何で今日なんだ！  
何で俺が遅刻した日にっ！

恐らくもう何人かは死んでいる。

俺がいたとしても守れたかどうかは分からない。  
だが、守れたかもしれない。

しかし現実として俺は遅刻し、クラスメイトを守れなかつた。

後悔の念に駆られながら、もう人気のなくなつた廊下を駆け抜け  
る。

目的はなかつた。ただ走る。  
もう何も考えたくなかつた。

曲がり角を曲がる。

「つ！」

そこで思わず息を呑む。

そこには、地獄が広がつていた。  
まず最初に感じたのは、吐き気を催す様な濃厚な血の匂い。  
そして、床に横たわるクラスメイトの死体。  
顔が原形を保つていて確認できるのは3人、かなり仲の良かつた  
奴もいた。

皆、体中食り喰われた様に千切れていった。

友人の側に膝をつき、瞼を閉じさせる。

恐怖に染まつたまま、もう動かない目を隠す様に。  
俺にはもう見ていられなかつた。

「喜多 、浜路 」

友人達との思い出が脳内にフラッシュバックする。  
そして、目の前の友人達の姿が目に映った瞬間 、

俺の中で怒りが爆発した。

まるで、火山の噴火の様に。

悲しみ、後悔といった感情など塗りつぶして、俺の心の中を憎しみ、憤怒といった感情で埋め尽くした。

そして俺の下した決断。  
友の死を背負う覚悟。

魔物共を一匹残らずぶち殺す。  
それ以外は考えられなかつた。

**死を呼ぶ力 非情な現実と確かな覚悟（後書き）**

すいません！

5話の更新地味に遅れました！

さて、それと報告です。

4話にナナのイラストを載せましたー！（パチパチー）

是非、見て下さい。

## 絶望の渦 2度目の絶望（前書き）

気がついたらPV1000突破してました！ありがとうございます！  
多いのかな？

始めたばかりとすると少なくは無いと信じます。  
ともかく、皆さん応援ありがとうございます！これからも読んで下さい！

## 絶望の渦 2度目の絶望

俺は再び走り出した。

復讐<sup>ターゲット</sup>の相手の魔物を探して。

魔物共は、どこにいる？

ゲート門はどこだ？

やはり教室の方か？

考えをめぐらせていた時だった。

「きやーーー！」

教室の方から悲鳴が聞こえた。

まだ生きている人が居る！？

助けに行かなくては！

もう魔物共には殺させない。

「うおおおー！」

ズガアーン！

声がした方へと、壁をぶち破つて最短距離で進む。

ドガツ！

最後の壁を突き破り、悲鳴のした教室に突っ込む。

中を見ると、クラスメイトの的場おとばという少女が鎌を持つ魔物に捕まっていた。

そして少女は俺に気づいて助けを求めようとした。しかし、

「修治君つー助け

ブンツ、ドチャツ！

助けを求める言葉は最後までは言われなかつた。

最初、何が起きたのか理解出来なかつた。  
いや、本当は理解していた。

魔物が少女に鎌を振り下ろした。助ける暇も無かつた。  
ただ、俺の脳は理解する事を拒んだ。理解したくなかった。

突如、脳裏にある言葉が蘇つた。

魔物は君の様に強い多くの魔力を持つた人に惹かれている  
事は分かつているー

急速に体から力が抜けていった。  
先ほどまでの激しい怒りも消えていく。

喜多、浜路、的場、他のみんな。

俺は彼等を救えなかつたんじやない。  
俺のせいでの死なせてしまつたんだ。

だつて、俺のせいでの門ゲートが開いたから。

「う、あ、あ、あ、ああう！」

もう嫌だ。  
逃げ出したい。

ただ、そう願つた。もう何もしたくない。

すると、魔物が俺に向かってきた。

防ぐ気は無かつた。

そうだ、これで終わりにしてくれ。

俺は死を待つて目を閉じた。

## 絶望の渦 2度目の絶望（後書き）

修治君がちょっと酷い事になりました。  
でも大丈夫です。明日は来るさ！

さて、3話の光の登場シーンにイラスト載せました。  
それで、今回と前回のイラスト。リアルでお友達の人が描いたんですよ。

その人の書いてるN o v e l 、 S W O R D      O R      S C Y T H  
Eも興味があれば読んでみて下さい。  
SOSって検索しててると思います。

「それで終わりか？」

「えつ？」

ズシャアアア！

不意にかけられた声に目を開く。

するとそこには鎌ごと真っ二つになつた魔物と1人の少女がいた。  
恐らく、この少女が魔物を斬り殺したのだろう。

少女は金髪に白い肌、そして燃える様な紅い瞳バスターードソードを持っていた。  
また、手には少女の体の3分の2ほどの大振りの大剣をもつており、魔物を斬り殺したのものこの武器でだろう。

そして少女は、その紅い瞳で俺を睨み付け、

「立て、意氣地なし」

いきなり意氣地なし呼ばわりしてきた。  
仕方がないのでとりあえず立ち上がる。

別に助けてもらいたくは無かつたが、一応礼儀としてお礼を言つておこう。

「助けてくれてありが

「何故、攻撃しなかつた？」

「 」

礼を言おうとしたが、少女は礼を聞く氣など無いらしく一きなり質問してきた。

そして、更に少女は言葉を続ける。

「貴様の力なら今の魔物程度倒せただろう」

「俺は 」

死ぬ気だった。と、

自分のせいで周りの人が危険に晒されるのなら、自分が死ねばいいと思ったと、そう言つべきか。

「俺のせいで周りの皆が死ぬのなら、俺は 、 、

「自分が死ねばいいと思ったのか?」

言おうとしていた事を言いに当たられる。  
図星なので何も言えない。

すると、少女の俺を睨み目つきが更に鋭くなる。  
そして少女は大剣を俺に突きつけて、言い放つ。

「甘つたれるなよ、意気地なし」

更に少女は言葉を続ける。

「確かに魔物達は強い魔力を持つ奴に引き寄せられる。だが、たつ

た1人にそこまで影響はされん」

「でも、奴等は俺の魔力に 、

ザンシ。

「自惚れるなよ、意氣地なし」

俺が反論しようとしたが、少女は大剣を地面に振り下ろし俺を黙らせた。

「貴様の魔力は強いが、単純な強さや保有量ならお前よりある奴など大勢いる」

そして、文字通り俺の反論を切り捨てた。

だが、俺は納得がいかない。

「じゃあ、何でだよつ！？」

つい声を荒らげる俺に、少女は肩一つ動かさない。燃える様な紅い瞳でありながら、相反する氷の様に冷たい眼差しで俺を射抜く。

自分より小さい少女から、凄まじい威圧感を感じた。  
プレッシャー

俺は少女から目を外せず、硬直していた。

と、その時。

ドガアアアアアアアン！

校庭の方で爆発が起こった。  
外で誰かが戦っている様だ。

少女は、時間がないな と咳き、俺に問い合わせた。

「問おう、貴様は戦う気は無いのか？」

俺は 。

「クラスメイトの仇。そして人類を守る いや、そんな大仰なものではなくていい、周りの大好きな者を守る為に戦う気は無いのか？」

貪り喰われた喜多達、目の前で殺された的場、走つて逃げて行つた加藤達。守れなかつた者、守るべき者。それら1人1人が頭に浮かぶ。

「戦う気があるなら拳を握れ！敵をみろ！見事、守りたい者を守つてみせろっ！」

俺の力なら魔物に対抗できる。

なら、今やるべき事は一つ。

「<sup>ゲート</sup>門をぶつ壊す」

俺の返答を聞くと少女は満足そうに頷いた。

「よく言った。ならば共に戦う者として名乗ろっ」

少女は大剣を担いで名乗った。

「ゲート破壊工作特殊戦闘部隊所属、リリイ・リュミエールだ」「GSSC所属なのか」

知らなかつた。

「何を今更、監視役がいると聞いていただろ？」「

ああ、そういえば。

「で、リリイ・リュミエールだっけか」

「リリイでいい。ちなみに歳は同じだから呼び捨てで構わない」

同じ年か。

堂々とした態度と物言いのせいで年上かと思っていた。

「で、門<sup>ゲート</sup>は何処にある？」

聞くとリリイは、ふつ、と笑うと、ついて来い、と言つて走り出す。

俺はリリイを追つて走り出した。

復活 拳に再び力を込めて（後書き）

修治君復活！

少々早すぎましたかね？

思つた事があれば感想下さい！

それと 新キャラ追加！

挿絵の方は追い追い載せてゆきます。

## 知性を持つ魔物　I/O幾つ？（前書き）

PVが2000超えました。

多いんでしょうか、少ないんでしょうか？

兎も角、今後も区切りの良い数字を超えましたら「J報告します！」

皆さん、応援ありがとうございます、そしてよろしくお願ひします！

## 知性を持つ魔物　Iの幾つ？

校庭に出ると、公園で見た時と同じ門が開いていて、そこから魔物達がぞろぞろと出て来ていた。

そして既に、数名の人が魔物達と戦っていた。  
その人達にリリイが呼びかける。

「すまない、遅れた。これから私達2人は門ゲートを破壊する。皆は魔物達を校庭に留めておいてくれ！」

すると、戦っていた人達の中の1人が答えた。

「待つてましたよ、リリイさん。まったく、早く来て下さいよ。なんせ、俺らだけじゃ門ゲートを破壊する程の力はないですからね！」

それを聞いてリリイは渋い顔をした。

「誇らしげに言つな、誇らしげに」

そして、表情を引き締めて言う。

「ともかく、頼んだ！」

「了解です。まっかせて下さいよ！」

リリイは仲間との会話を終え、今度は俺に向かって言った。

「それでは、行こうか　　門ゲートをぶち壊しに」

俺らは向かつて来る敵を蹴散らしながら門へと向かつて行つた。

俺も頑張つて魔物達をぶつ飛ばしていたが、リリイは凄まじかつた。

戦闘技能は俺を遙かに凌駕していた。

どうやらリリイは瞬間移動テレポートが使える様で、凄い速度で敵を切り刻んでいた。

リリイの大剣では普通、大振りで遅い攻撃になつてしまつ。だが、リリイは瞬間移動テレポートを上手く使い、大剣の重い一撃で敵の体を四散させていた。

俺も負けじと魔物を倒していく。

が、やはりリリイにはかなわなかつた。

こうして、俺達は順調に門へ近づいていた。

門に近づくにつれ、魔物の数も増えていく。

俺とリリイは相変わらず魔物をぶちのめしつつ進んだ。

リリイの動きには無駄が無かつた。勿論、瞬間移動の影響も大きいが、それ以前にリリイの動きは精錬されていた。

大剣を振り、敵を薙ぎ倒す。そのまま慣性の法則に従つて、失速した所で切り返す。そして、その動作の隙間も蹴りや瞬間移動で埋める。

その動きはもはや美しいとさえ言える。

対して、俺はと言つと

ドゴツ、ズガツ、ガスツ、

力任せに殴り飛ばしていた。

まあ、良いんだが。美しさは欠片も無いな。

そんなこんなで門<sup>ゲート</sup>に辿り着いた。

その時。

「伏せろ！」

へ？

と、とりあえず障壁展開ツ！

ボスツ。

気がつくとリリイに頭を抑えつけられ、顔面が地面に着いていた。  
一応、障壁越しに。間に合って良かつた。

そして次の瞬間、

ドガアアアアアアアアアアアアツ！

俺の上をビーム砲のようなエネルギーの塊が通過した。

リリイはサツとビーム砲の放たれた方を向いた。

俺もつられてそちらを見る。

辺りの魔物は皆消し飛んでいた。

しかし、一匹だけ残っていた。

俺とリリイの目線の先に、初めて見る人型の魔物が立っていた。

「外したか。まあいい、そもそも遠距離攻撃は性に合わん」

それがそいつの第一声だつた。

喋つた！？

知性のある魔物など居たのか！？

俺が知らないだけかもしれないのでリリイに聞く。  
しかしリリイも知らないようで、

「こんな 知性が有り、喋る魔物など知らない。私も聞いたこと  
がない」

と、言つた。

それより、外したかつて言つてたがやはり俺達を狙つたのか？

そう考へていると、魔物はこちらに歩いて來た。  
見た目、すぐに襲いかかつてはこなさそつだが、さつきのビーム  
砲の事もあるので、身構える。

隣でリリイも身構えるのがわかる。

すると、魔物が口を開いた。

「そんなに身構えなくとも、別にもう攻撃する氣は無い。さつきの  
は気まぐれで放つてみただけだ」

気まぐれ？あれがか？

実はさっきのビーム砲、ナナと比べても5倍くらいの威力があつ

た。

あれが気まぐれとは 。

「先ほどのはやはり貴様が？何者だ？」

リリイが尋ねた。

おい、リリイ。人に名前を聞く時は自分から名乗れよ。

人じゃなくて魔物だからいいのか？

すると魔物は答えた。

「済まない、申し遅れたな。我是怪力のスライン。7将の1人だ」

## 対峙7将 7将の1人は脳筋でした

7将、か。

なんだか無茶苦茶強そうだ。

憶測に過ぎないが、四天王の7人バージョンみたいなものだらう。

「7将とは何だ？」

リリイが聞く。

「つむ、我等魔族の中で最強の7人の事だ」

スラインとやらは誇らしげに答えた。

「7将の中でも順位はあるのか？」

更にリリイが尋ねる。

それは俺も気になるな。

その質問にもスラインは答える。

「勿論だ。まあ、我はその中では最弱だが、お前らの様な猿程度なら瞬殺出来る」

力チーン。少し鶏冠にきた。

人間様を猿呼ばわりとは良い度胸じゃないか。

まあ、魔族からしたら人間は“進化した猿”扱いなのかもしけない。

い。

乗る方がバカな低俗な挑発だが少しイラッときた。

「このスラインとかいう奴、完全に俺らを見下してるな。  
まあ、少し前に言つた通り乗る方がバカな挑発だし、そもそも相手が「将とかいう奴らしいし、こんな挑発に乗るのは正真正銘のバカだ。

俺は賢いからとつと逃げ

「修治、奴を斬るケイリ」

「いました、バカが。  
つていうか“斬る”の言い方おかしくね？」

「ほう、我と闘るか？猿」

攻撃する気は無いとか言つていたくせに、嬉しそうに殺氣を放つスライン。

「当然だ。殺ヤつてやる」

それに対して負けじと殺氣を放つリリイ。

まずいな、この話の流れだと確実に闘つ事になる。  
それより、 “やる” の言い方もおかしくね？

「良い度胸だな、猿」

「ひからいの台詞だ、化け物」

やばいって、もう臨戦態勢じゃん。

このスラインという魔族、その中では最弱と言つても「将の一人

だ。

それはつまり“全魔族中で7番目”といつ事だ。  
リリイも強いが、1人で、しかもキレて冷静さを失っている今の  
状況で勝てる相手ではない。

このままではきっと、リリイはスラインに殺されてしまつだらう。

仕方ないなあ。

「おい、スライン。俺と鬪れ」

本当は俺こんな仲間を助ける様な熱いキャラじやないんだけど。  
まあ、リリイには一度救われたし、命も心も。

「よかねつ

スラインはすぐに承諾してくれた。  
良かつた。

が、やはりリリイは反論してきた。

「修治、そのムカつく奴は私が

「いや、俺が鬪つ

「つー?」

しかし俺はその言葉を遮る。

俺の本気の剣幕にリリイが息をのむ。

「悪いな、今回はこいつも門も俺が潰さなきゃなんねえんだ」

俺のわがままという事にしておく。

死なせない為だなんて言つたら素直に従わないと思つからな。

「 分かった。」

リリイの説得完了。

さて。

「 では始めよ!」

スラインの方から声をかけて來た。

初めるのか。やだな。本当なら逃げ出したい所だ。

戦略的撤退をし

「 怪力のスライン、参る!」

そう言つた途端、俺に向かって突っ込んで來た。

しかし、速い!

今までの魔物とは桁違いた。

「 プロテクト!」

俺は障壁を生成する。

ガンツ。

障壁にスラインがぶつかる。

「ぐつ！？ 痛いな。何だ？」

やはりフ将といつだけあって強い。

最初のイノシシの時の様に潰れて死んだりはしない。

ダメージはあるが、痛いな、と言う程度だ。

そしてスラインは、何故自分の攻撃が防がれたのか理解出来ていない様だ。

しばらく考え、考えても埒があかないと思つたらしく、もう一度、

今度は全力で殴りかかって来た。

ブンッ！

「プロテクト！」

ガシィィィィ！

再びスラインの攻撃を防ぐ。

今度のは渾身の一撃だったようで、スラインの拳はダメージの跳ね返しで傷だらけで血まみれになつた。

「我が攻撃でも破れぬ壁か。ならば

嫌な予感。

「プロテクト！」

「反応出来ない速度で圧倒するまでつー」

直後、ガシイッ、と音がした。

見るといつの間にかゼロ距離に来て繰り出されたスライインの拳を俺の障壁が防いでいた。

やはり速い。はつきり言つて全く攻撃が見えなかつた。

今のが攻撃を防いだのも勘に助けられただけだ。

こんな攻撃を連續でされたら防ぎきれるか？

そして、そんな俺の気持ちを見透かすような笑みを浮かべ、スライインは言つた。

「我がスピードについて来られるかつ？」

スライインの猛攻が始まった。

**対峙7将** 7将の1人は脳筋でした（後書き）

9話目です。

それと、7話目の最後にリリイのイラスト載せました。  
是非ご覧あれ。

# 全身装甲 これぞ升！

スラインは高速で俺に拳を叩き付ける。

まるで機銃の掃射を受けているみたいだ。  
もう一発一発対応してはいられないで、  
でかい障壁を生成して  
防いだ。

と、そこで違和感を感じる。  
見るとスラインがない。

## 「プロジェクト！」

ガツツ！

背後でスティンの拳が障壁にふたたぶたる。

ちいい、小瀬なつ！

そこでスラインが異変に気づいた。

俺とすると「やつと気づいたか」って感じだけ。スラインの拳と腕はズタズタになつていた。

俺の障壁は衝撃を全く吸収しない。抗力100%の壁だ。だから、殴れば殴った分だけの力が跳ね返る。

よって、フルパワーで殴りまくったストライクの拳と腕がスタスタになつたという訳だ。

しかし、俺の『えたダメージはそれくらいで、俺自身は奴に一撃も加えていない。

いつまでも防ぎきれるか分からぬし、籠城したらリリィが狙われる。

まずいな。

そんな事を考えていたら、スラインも同じように焦りを見せていた。

「くつ、猿<sup>2</sup>」ときがあ、調子に乗るなア！」

そして、さつき以上に激しい攻撃を繰り出してきた。

「チヒアアアツ！」

「プロテクト！」

ガツッ。

「ぬんつ！」

「プロテクト！」

「ゴッ。

2発強力な攻撃をだして、スラインが少し止まる。

少しのチャンス。

ここで賭けに出る。

足に力を込め、大きく後ろにパックステップを踏む。

その時、後ろよりもなるべく上へと跳んだ。

スラインは俺が攻撃して来ると思っていたらしく少し驚いた様だが、すぐにパックステップしている俺に攻撃をしようと突っ込んで来た。

そこで俺は障壁を生成、それを足場に空中から更に上へ飛び上がつた。

今度こそスラインの顔に驚愕の表情が浮かぶ。

そして俺は飛び上がった先に障壁を生成、それを蹴りつける。更に体をひねり、スライン目掛けて全力の蹴りを叩き込む。勿論、足先には障壁を展開して。

イメージ的にはラ○ダーキックみたいな飛び蹴りだ。

スラインは即座に避けようとする。だが全力での突進の最中だ、慣性の法則に従い止まれない筈。

しかし、その予想は外れた。  
確かに普通なら止まれなかつたであろう。  
だがスラインは普通ではなかつた。

「う、おおおおお！」

ズガアアアアアツ！

スラインは野太い叫びと共に俺に向けてビームを放つた。  
そしてその反動と障壁で跳ね返つたビームの衝撃で止まるビーム  
が大きく後ろへ下がつた。

そして

ズドオオオン。

俺は何もない地面に墜落し、クレーターを穿つた。

「惜しかつたな。だが、あの程度のフェイントは我には通じんぞっ。」

スラインが余裕そうに言つてくれる。

フェイントも駄目だ。

これで万策尽きたか。

仕方ない。“あれ”を使うか。

俺は目を閉じ、心を落ち着かせる。

そして、己が技の名を呟く。

「全身装甲」

それを見たスラインが笑う。

「どうした、死ぬ気になつたか?」

どうやら、瞳を閉じた俺を見て観念したと思ったのだろう。だが、それは違う。

俺は死ぬ覚悟などしていない、殺す覚悟をしただけだ。

そして、俺は拳を握りしめ、スラインとの戦闘で初めて自ら突つ込んでいった。

スラインも拳を構える。

「ははははっ、そうだっ、やはり闘いはそりでなくてはなっ…」

バトルジヤンキー  
戦闘狂か。

しかし、俺自身も闘いで荒ぶり、昂揚を覚えていた。

そして、放たれたスラインの拳。

俺も右腕に全力を乗せて放つ。

迫るスラインの拳。

それに交差する俺の拳。

どちらも互いにヒットする軌道。

「うおおおおおおおおお…！」

「はあああああああ…！」

衝突。

そして決着が着いた。

相手の骨や肉を粉碎したのを感じた。

スラインはお互いの攻撃が当たった直後、俺の拳 + 自らの拳の分の威力を受け、それに耐えきれず粉々の肉片と血潮となつて飛び散つた。

ドチャドチャドチャッ。

スラインだつた血肉が降り注ぐ。

あまりグロ耐性の無い俺にとっては好ましくない光景だ。

だが、全力で闘つたのでどうあえずスラインに敬意を示し、合掌する。

南無南無、御冥福をお祈りします。

と、そこで、

「し、修治つ！ 最後の一撃、あれは何だ！？ あれほどの敵を一撃で粉々にするなど、」

リリイが酷く狼狽した様子で聞いてきた。

俺は質問に答える事にした。

「あれは、俺の拳の威力だけじゃなくて、障壁で跳ね返った奴の攻撃の威力も加わってたんだよ」

が、すぐにまた反論で返される。

「しかし、貴様は先ほどプロテクトをやつし使つていなかつたではないか！」

とりあえずまた答える事にした。

「あれについてはな、あの時俺、全身装甲つてこうのを発動させたんだ」

「あーまー？ 何だそれは

リリイは何の事だか理解していなかつた。

そりやそりや。

兎も角、説明を続ける事にする。

「全身装甲つていうのは、プロテクトで全身を覆つたものだ。勿論、<sup>アーマー</sup>動ける様に関節部で区切つて部分部分で小さなプロテクトを展開した。プロテクトが盾ならアーマーは鎧だな」

俺の話を聞いて、しばらく考えていたリリイだが、いかなりガバツと顔を上げて俺に言つた。

「しかしつ、それでは最強ではないか！全身をあの障壁で覆うなど！何故今まで使わなかつた！？」

「それは、

それは、過去のトラウマのせいだ。

この力のせいで氣味悪がられ、避けられた。

中学では隠した。そうしたら友達が沢山できた。

そして、この間までプロテクトも使わなずに、普通に過ごしてきていた。ただ、能力をひた隠しにして。

全身装甲も、こんなピンチになるまでは使いたくなかった。

だが、それも今日で終わりだ。

俺は、仲間を守る為にもう一度この力を使つ！

だから俺はリリイにこう答えた。

「ぐだらない過去に縛られてた。だけども、俺は自分の力と向き

合つよ。この力で大切な人を守れる様に。リリイも俺が守るよ

俺の心から思つた事を伝えた。

俺を救つてくれたリリイも大切な人だ。光やナナ、他のみんなの  
ように。

だから俺が守る。

すると、リリイはいきなり顔をボンッと赤くした。

何故？

そして、よくわからない事を呟き始めた。

「た、たつ、大切なっ、人！？ま、守る？わ、わ、わわ  
私を、まも、守るつつ？」

支離滅裂で何が言いたいのかよくわからない。  
が、リリイの中では結論に達した様で、

「私を 守る。 そうか、スラインとかいう奴と戦つたのも  
。

修治、そ、その、スラインと戦つたのは その 奴が強いと分  
かつていて その わ、私を まも、守ろうと してくれ  
た のか？」

俺に聞いてきた。

あちやー、バレてた。

怒られるかな ？

「ああ、実は

「

怒られるー。

そう思つた。  
が、叱責は飛んでこなかつた。

その代わりに

「そ、そつか。 その、あ、ありがとうー。」

お礼を言われた。

「あ、ああ」

予想外の事に面食らつ。

そのあとしばらく、何故かリリイは嬉しそうにしていた。

## 入隊GSSC これで俺も秘密結社入り！？

「それでは、修治君のGSSC入隊を記念して、カンパニー！」

『カンパニー！』

学校での魔物の襲撃の後、俺はGSSCに入る事にし、その旨を隊長さんに伝えた所、現在に至る。

一応言つておくが、今俺が居るのは学校ではなく、GSSC本部だ。

ちなみに学校の方はGSSCの隊員が忘却術を使つたり、科学力にものを言わせて修復したりして收拾をつけたらしい。

そして、もう一度言つが、今俺はGSSC本部に居るのだが

「何故こうなつた？」

本部に入つてすぐ、広い部屋に通されたのだが、中はパーティー会場となつていた。

「 隊長はこういつた楽しい事が好きでな。私の時もそつだつた

隣でリリイがジュースを片手に言つ。

「私の時も同じ。あの隊長、一人でもパーティーやりそなうなのよね

そして光も口を揃えて言つ。

隊長さんのキャラクターがよく分からなくなってきた。

会場を見渡すと、おやじ様の支部の人全員がいるのだろう、沢山の人がいた。  
職員1人増えたくらいで普通こんななちゃんとしたパーティーはないだろ。

そうして辺りを見回していくと、隊長さんが歩いて来るのが見えた。

「やあ、修治君。楽しんでるかい?」

向こうから声をかけてきた。

「ええ、まあ。あと、祝ってくれるのも嬉しいんですけどここまでしてくれなくても」

俺がそう返すと、隊長さんはいにや、と首を振り答えた。

「気にしないでくれ。自分の趣味でやつてるからね」

2人の言っていた事はどうやら本当らしい。

「そういえば、血口紹介がまだだったね

あ、そういえば。

あの時名乗ったの俺だけだったな。

「GJGの日本支部本部隊長を務めさせてもらっていた、

盤田典

盛だ

よろしく、と手を差し出してくる。

俺も、よろしくお願ひします、と手を握る。

「これから共に魔物から人類を守つていこう

「はい」

こうして、俺の長い戦いが幕を開くのか。  
なんか格好いいな。

「あー、後一つ」

「何ですか?」

「何だ?」

長い話はいめんだ。

「修治君はまだ戦闘に不慣れだろう?だから出撃時には誰かと一緒に  
に行つてもらおうと思うんだけど、いいかな?」

「ええ、いいですよ

俺とすると、特に不満はない。  
別に1人の軍隊じゃないし。

するといきなり光がすっ飛んで来て言った。

「それじゃあ、私がやりますっ！」

が、虚しいかな

「Ｚ・Ｚ・Ｚとリコミホール君に頼もつ」

隊長さんの発言で、光は床に崩れ落ちた。  
おーい、大丈夫かー？

それと、何故カリリイが小さくガツツポーズしていた。

そして、隊長さんは更に言葉を続けた。

「Ｚ・Ｚ・Ｚとリコミホール君には、まず天野若屋高校に転入しても  
らねつ」

『どうしてー？』

隊長さんのその発言に、俺とリリイ、死んでいた光さえ驚いた。

隊長さんは答える。

「どうして、つて皆一ヶ所にいた方が緊急時はいいし、それとＺ・Ｚ・Ｚの為でもあるんだ。学校という場所で人と触れ合つて感情豊かになつて欲しいんだ。ほら、Ｚ・Ｚつていつも全く感情を表情に出さないだろう？だから

「え？あいつ笑つてましたよ、この間」

隊長さんの話の途中、つい割り込む。

と、次の瞬間、

『ええええええつつ！？』

俺以外の3人の声が重なる。

「アリハリの事だ？」

あのへどか

「修治、どうして事なの!?」

心底信じられないとしていた風の3人

「いや、乙女なんかじやなくてちゃんと名前ほしいかなーと思つてナナつて名前考えてあげたんだ」

そう説明するも、納得できない風の3人。

心があるんだから、笑ってもおかしくはないと思うんだが。

「ま、まあ、それなら尚更だね。もつと感情を豊かにしてもらいたいし」

動搖しながらもそう締めくくうとした隊長さん。

しかしそれに光が食つてかかつた。

「じゃあなんでリリイもソ？」「

「修治君の戦闘訓練だよ。彼女、接近戦は得意の得意だろ？」「

「なら私だつて！」

光も能力に自信があるのだろう。

それにしても光の能力ってどんなだ？

「光君は教えるのは不得意だろ？」「

そんな光をばっさり切り捨てる隊長さん。容赦ねえ。

「うう

光も反論できない様だ。  
自覚していたのか。

「ま、そういう事だ。頑張つてくれよ」

そう言つて隊長さんは立ち去つていった。

そしてここにはまた死んでいる光。

光の周りにはどよーんとした空気が漂つていた。

それにしても何で光は立候補したんだ？  
ま、そんな事どうでもいいか。

それより、ナナとリリイが学校に来るつて事は制服着てくるんだ

よな。

どんなだらう、楽しみだ。

入隊GSSC これで俺も秘密結社入り！？（後書き）

戦闘後の話です。

次からは日常パートに入ります！

俺の守った日常

それは遅刻（前書き）

PV4000超えました。

ありがとうございます！

次の報告は5000を超えた時に。

## 俺の守った日常 それは遅刻

翌朝、いつものようにカーテンの隙間から差し込む朝日を浴びて、目覚まし時計で目を覚ました。

昨日の戦闘（とパーティー）の疲れが残っているのか、頭がぼけ一つとしていた。

そうしてしばらく惰性で布団の中でじっとする。

と、ふと時間が気になった。

布団の中から手を伸ばし、目覚まし時計を持つて来る。寝ぼけ眼のピントが徐々に合つてくる。

「 7時30分か」

時間は7時30分を回っていた。

「つて、7時30分！？」

そこで意識が一気に覚醒する。

今日は学校だ。この時刻だと遅刻しかねない。

俺は布団から飛び出し、台所でパンをトースターに入れ、その間に顔を洗い歯磨きをして制服に着替える。

そしてチーンとパンが焼きあがったのを確認するとそのパンにバターを塗つて口にくわえて食いながら家を飛び出す。

勿論、戸締まりは確認した。

そういう訳で学校へgo！

魔力で脚力を強化して走る。

あの後、魔力で身体能力を上げる方法を教えてもらつた。  
実は既に自然と使っていたらしく、そうでなければスラインとも  
渡り合えなかつたらしいが、教えてから意識してやつたら凄く  
強化されて地味に嬉しかつた。

という訳でダッショ。

道行く人が驚愕していたが、まあいいだろう。

ダダダダダダダダッ！

猛ダッショで学校に到着。

まだチャイムは鳴つていない。

遅刻しかけて登校。

昨日と同じシチュエーションに昨日の事を思い出す。

俺は暗い気持ちを振り払う様に今はその事は忘れておく事にする。

学校の校舎などは昨日の騒ぎなどなかつたかの様に日常通りだつた。

思い切り、靴ロッカーの方へ足を踏み出そうとした時だつた。

「修う治いい！」

俺の名を呼びながら怒りの表情を浮かべて光が走つてきた。

まあまで、話せばわかる。

「どうした？」

「どうしたじゃないよつ！あんた足速すぎー強化使つたでしょー。」

「追いかけてきたのか。珍しいな、光が寝坊するなんて」

俺がそう言つと光は少し拗ねたよつて答えた。

「待つてたのよ。なのにあんた猛ダッシュで置いてつりやつし」

「そうか。それは 悪かつた」

「まあ、いいわ」

「そうか、それより 普通なんだな」

「は？」

光は俺が何を言つているのか分かつていないうだ。

昨日の件はGSSCの職員が校舎を修理したり、関係者の記憶を操作したりして元通り何もなかつたかの様にした。

しかし、人を生き返らす事は出来ない。

その場合、死人に関係した人の記憶を消し、死人の記録を消す。つまり、死んだ人は始めから存在していなかつた事になるのだ。喜多、浜路。

彼等は一般的の認識では「誰？」という感じなのだろう。

光はその事を考えた事は無いのだろうか。

「 なあ、喜多つて知つてゐるか？」

そう聞いてみる。

すると光は「ああ、あいつね」と理解した。  
たがそれは光がGSSCの職員だからだ。

皆は知らない。記憶を消されたから。

俺も今まで他にも魔物に襲われていたのかも知れない。  
その度に記憶を消されて 。

「まあ、いいか」

俺は奴らを忘れない。  
それで十分だ。

と、そこで、

キーン」「ーンカーン」「ーン。

チャイムが鳴つた。

「やべえ、遅れるつー！」

「あ、ちょっと待ちなさいよー」

本日 2 度目のダッシュ。

HR間に合うかな。

まあ、無理か。

## 平穀無事 今日は普通の高校生！

「あーあ、最悪っ！」これもあんたのせいよ…」

げしつ。

光に蹴られる。

何で俺のせい？

あの後、結局HRには遅れた。  
そして、最近の学校としては珍しく、光と廊下に立たされた。  
そして、光がその腹いせで俺を蹴つてくる。痛い。

俺は謝ったのに。

というか、光が勝手に待つてたんじやないか。

俺は頼んでないし。

「そもそも何で待つてたんだ？俺は頼んでないぞ」

「え？えっと うう。その

「

なんか凄く困っていた。

それと何故か顔が少し赤くなっていた。

答えられなくて恥ずかしいのか？

「何でだ？」

追い討ちをかけてみる。

「えと、その、あー、うー」

困つて唸り始めた。

この様子なら蹴られる事はないな。

と、そこで光が「思いついた！」といつ顔をした。

「GURUの仕事よーん、仕事ーだから他意はないわー。」

GURUの仕事か。

なら最初からそう言えばいいのに。

というか何でそんなに慌てるんだ？

それより、そんなの必要か？監視はもういらないだひつじ。

そもそも、本当に仕事か？

じゃあもし仕事じゃないとしたらい何の為に

げしつ、げしつ。

俺の思考はそこで中断させられた。  
また光が俺を蹴りだしたからだ。

げしつ、げしつ。

「止めろって、痛いー！」

「うわあこ、ともかく修治が悪いのよー。」

げしつ、げしつ。

結局、1時限目が始まるまで俺は蹴られていた。

そして1時限目。現国の授業。いつものように先生の話を聞き流す。

ただ、今回はいつもと違いナナとリリイの事を考えていた。流石に翌日に転入してはこないと思うが、GSSSにならやりかねないとも思う。

そう思うと、期待と共に言い知れない不安がよぎる。

大丈夫だよな？

ゴツンッ。

ん？

突然消しゴムの欠片欠片が飛んできた。

飛んできた方を見るとクラスメイトの江藤えとう正吾じょうごが手を振つていた。

正吾は小さい時からの仲で、俺と光との3人でよく遊んだ。

正吾は光が好きらしいが、光は全然振り向いてくれないらしい。この事を正吾に相談された時、「他に好きな奴やつがいるのかな？」と言つたら睨まれた。何故だ。

で、用はなんだろう。

「何？」

「そろそろ当たる」

授業をちゃんと受けていなくて気付かなかつたが、順番に指名されて俺の2つ前の席の人気が指名されていた。

「P78。今、問2」

「サンキュー、正<sup>吾</sup>」

正<sup>吾</sup>のおかげで何事もなく授業を終える事ができた。

結局、この日は何も起らなかつた。  
平和は良いことだな。

あの2人が学校に来るのも来週くらいからだらう。

## 平穏無事 今日は普通の高校生! - (後書き)

かなり短くなりました。すみません。

1話目と同じくらいではないでしょうか。

ですが、区切り的にここがきりがよかつたのでこうなりました。

次はもう少し長く書くよう努力します。

## 転入生 転入イベントだ！（前書き）

PV50000超えました。

次は100000の時に報告します。

## 転入生 転入イベントだ！

日常生活に復帰した初日、何も無く平穏に過ごす事ができた。

そして、その翌日の今日。

只今HRをしているのだが、

「あー、転入生が二名いる」

教師のその発言で平穏は破られた。

このタイミングで2人転入ってナナとリリイ以外有り得ないだろ。来週くらいから来るだろうっていう考えが甘かつた。

「おーい、入つてくれ」

教師がそう呼ぶと、教室の前のドアがガラリと開き ナナと

リリイが入ってきた。

ほらな？やつぱりこの2人だ。

2人は教師に促され名前を言つ。

「リリイ・リュミールだ。よろしく

「ナナ・リュミールです。よろしくお願ひします」

ナナはリリイの姓を使ってるのか。

姉妹設定 はちょっと、無理そうだな。

## 亲戚設定か？

と考えていると

『.— 二二一 』

ナナとリリイという美少女2人の転入にクラスの野郎どもが騒いでいた。

研究には気持ちは分からなくてもないが、皆持つて叫んでいるのは客観的に見てキモい。

「黙れ、男子共！静かにしろ！2人は留学生だ。分からぬことも多いと思うから、その時は皆で助けてやれよ。 それと、日本の文化とか言って変なことを吹き込むなよ？」

「はーい」と返事をする。

リリイは江藤の後ろ、ナナは宮野の後ろに座れ。

はい

2人は先生に言われて席についた。  
ナナは俺の後ろか。

HRが終わり、教師が教室から出て行く。

いつもなら皆、授業の支度をしたり、友達と雑談したりと、思いの事をし始めるのだが

「ねえ、どこから来たの？」

「「」趣味は？」

今日は皆揃つてリリイとナナの元へと群がつて質問を浴びせかけていた。

つか、ご趣味は？つてお見合いの定型文かよ。

2人は1時限目が始まるまでひたすら質問攻めにあつていた。そして、1時限目が終わると、皆また2人に群がる。休み時間の度にそんな感じだった。

2人の所へ行つていなかつたのは、俺と光、それと平井さんというクラスメイトだけだつた。

平井さんは名前を平井ひらい 沙耶禪さやかといい、氣さくで明るく、氣の利く性格の女の子だ。

左耳にはピアスをしている。うちの学校ではそういう物は禁止されていない。

髪はショートヘアで、色は、紫キャベツ溶液の強い酸性反応のような赤色をしている。一度、染めたのかと聞いたら地毛だとつていた。

そんな平井さんが2人の所へ行かないのは何故だろう。明るいと言つた通り、暗い人ではない。

俺と光は2人を知つてから行かないのは何故だろう。明るいと行かないのは少しおかしい。

ま、いいか。

考えてどうこうなる事ではない。

そんな訳で質問攻めにあつていた2人だが、その回答はそれぞれ

の性格が大いに表されていた。

まずはリリイの場合。

最初に1人の女子が話しかけた。

「ねえねえ、リリイさん。ビニの国から来たの？」

それに対しリリイはこう答えた。

「元から日本にいた」

はい？ ちょっとリリイさん、その発言はどうつかと。

「え？ 日本にいた？ でもさつき先生は留学生つて

案の定、質問した女子生徒は混乱していた。  
それに対しリリイはしれつと言い放つ。

「そういうえば、そういう設定だったな」

あは、ははは。

もう乾いた笑いしかでないや。

それに先ほどから冷や汗かきまくりだ。

「せ、設定？ そ、 なんだ

」

女子生徒は結局苦笑いを浮かべながら去つていった。

その後もリリィの発言の度に重要な事がバレるのではひやひやさせられた。

GUCCIって秘密にしなきゃいけないんだよな？

ナナの場合

リリィの時は別の女子が代表して質問した。

「ナナさん、リリィさんと同じ苗字だけど 見た所姉妹ではなさそうよね？」

「ええ」

「姉妹ではないの？」

「ええ」

え？認めちゃうの？

まあ、親戚つて設定もありか。

「そうなんだー」

「はい」

「そ、そつか。じゃあね」

質問した女子生徒は、ナナの返事が素つ氣なもあれて去つていつ

てしまつた。

そして次の人に選手交代した。

次に来たのは 加藤だつた。  
学校で門<sup>ゲート</sup>が開いた日、猛ダッシュで逃げていた奴。

「ご趣味はつ？」

思わずこけそうになつた。

何故その質問をチヨイスした？

「 ありません」

驚愕だつた。

そこは無くとも何か言つべき所だろ。  
まあ、ナナは嘘がつけない性格なのかもな。

「あ えつと、そうですか」

加藤もバトンタッチ。

こうして、氣まずいながらも物珍しさ故か質問を繰り返していった。

ナナは明らかに質問されすぎて困っていた。  
助けるべきか、否か。

そう迷つていた時だつた。

ナナがつつと俺の袖を引っ張つた。

何だろうと思つてナナを見る。すると、「助けて、助けて」とい

つたよつた田で見てきた。

正直、可愛いすぎた。

これは助け舟を出すしかないでしょー。

といつ訳で、クラス中に聞こえる様に言つ。

「転入してきたばかりで、こんなに質問ばっかされてたら2人共疲れるだろ?だから今田の所はこのくらいにしよう」

すると皆、ええー、といつた表情をしたが、すぐに、それもそうだな、といつた感じで散つていつた。

「あつがとうござります」

皆が散つていくと、ナナがお礼を言つてきた。

「お礼なんかいいつて、あのくらこの事で」

俺がそつ言つと、

「ですが、修治さんに助けていただいたというのが嬉しかつたです」

その様に言つて、微笑んだ。

その微笑みに少しへきりとする。

と、そこで、平井さんがじからを見つめているのに気づいた。

平井さんはナナが微笑むのを見て驚いていた。何故だ? ま、いいか。

と、まあ、そんな感じで2人の登校初日はつつがなく終了した。

そして放課後。

「修治、GSSC本部に行くわよ。招集」

さてしじょうがない、行きますかね。

という訳で俺、光、リリィ、ナナの4人でGSSC本部へと向かうのであった。

## 治療師 治療は傷に痛し

4人揃つてGASSO本部のビルに入る。  
そして、光に先導されて歩いていく。

じぱらへ歩くと、そこで、見知った人物に出会つた。

× 36198 — 4461 ×

「あれ、平井さん?」

「あ、こんなにひは。修治君」

「い、こんなひは」

香氣に挨拶されてつこひらも挨拶してしまつた。

いや、挨拶は悪い事じゃないんだけど、雰囲気にのせられた感がなんか悔しい。

それより、何で平井さんがここに? 、  
もしかして 、といつもひらくは

「そりいえば修治君に囁つたの忘れてた。私もGASSOの隊員なんだ  
よ」

「やはつそつですよね。  
もう驚きません。

でも 僕の中では平井さんって闘う人ってイメージではないん

だよな。

平井さんは保険委員だから治療ヒーラー師とかかな。

「平井さんの能力って何なの？」

「私？私の能力は回復系だよ。GSSC日本支部では私を含めて13人しかいないんだよ」

ビンゴ、大当たりだ。  
っていうか凄いな。

「私が隊員になってから、怪我をして治療に来る人が減ったんだよ」

平井さんはえっへんと胸をはる。  
でも、それは平井さんと関係あるのだろうか。  
別に治療ヒーラー師が増えても治療しに来る怪我人の数は変わらないと思うんだが。

が、光は俺が思っているのと逆の事を言った。

「そりや減るでしょ、アレじゃ」

それに合わせてリリイもうんうんと頷いて言つ。

「実際はアレのせいだ、怪我人が減ったのではなく治療しにいく奴が減ったのだがな」

2人共何を言つてるんだ？  
っていうかアレって何の事だ？

まあいい、それよつこに来た目的を達せねば。

まず、話題の軌道修正。

「今日リリリリでやねりとつて何?」

「リの前の門の事、りしきわよ」  
ゲート

スラインとかの事か。

「じゃ、隊長の所に行くか

さう呼びかける。

すると、リリイが悪巧みをするような笑みを浮かべて言った。

「その前にやることがある

何だ?

疑問に思つてゐると、リリイは瞬間移動で俺の後ろに來た。  
そして、俺の右腕を掴んだかと思つと

「えいっ

パキッ。

折つた。

(。 。 ;

あれー？

「つぐめやあああああああー！」

あまりの出来事に痛みを感じるまで数秒間かかった。

“プロテクト”も何もない俺の腕は、魔力で強化されたリリイの腕力によって、呆気なくへし折られた。

「ううう。へへへ、痛え！リリイ、何すんだよつー！」

痛みに耐えながらリリイに怒鳴りつける。

するとリリイは平然とした顔で言った。

「平井の能力を実感させへやうつと思つてな。平井、治してやれ」

酷え！その為だけに折ったのか！？

というか、折るところまでする必要あつたか！？指先を切るとかで良いだろつ！

「じゃあ治すよー、修治君

「ああ、頼むー！」

「うん、じゃ、いぐよー」

平井さんが能力を発動させた。

すると平井さんの右手を柔らかい光が包み込んだ。平井さんは俺の折られた腕にその手を添える。

ああ、これで痛みから解放される 。

そう思つたのは束の間だつた。

「ギキギキッ、ゴキッ、ズチャ。

俺の右腕から異様な音が鳴り、折られた時以上の痛みが俺を襲つた。

「ぐあああああつーべつ」

痛みをこりえて腕を見やると、グキグキゴキゴキと動いて元の形へと戻つていくのが見えた。

2秒ほどで完全に元通りになつた。

が、俺は痛みの余韻でしばらく動けずにいた。

そんな俺にリリイが話しかけてくる。

「これで治療しに来る奴が減つた理由がわかつたろ？ よほど重傷でなければ、皆自分で治す」

さつきのはそういう意味だつたんだな。  
俺も、大怪我しない様に気をつけよう。

「さて、それじゃあ今度こそ行くよー」

呑気にそう言つ平井さん。

恐るべき人だ。先ほどの俺の苦しみを歯牙にもかけていない。

はあ、それじゃあ、気を取り直して行きますか。

治療師 治療は傷に痛し（後書き）

どうも、杉です。

学校が期末試験なのでしばらく更新が遅れるか出来ないかのどちらかになると思います。

すみません。

終わったらまた頑張って書きますので。

## 会議 そして役職昇格！

平井さんが会議して隊長の元へ向かった。

隊長の部屋の前に着く。

「ノンノン。

「どうぞ」

ノックして返事があつたので入る。

「やあ、来たね」

「はい」

「じゃあ、早速だけど本題に入るよ。えー、今日集まつてもうつた理由だけど

「この間の門ゲートのこにですね」

隊長の言葉を先回りするリリイ。

「ああ、そうだ。君の報告では知性を持つ魔物がいたといつ事だつたが、間違いないね？」

「ええ、奴は自らをスラインと呼び、人並みの知性を保有していました」

「 そつか。あと 何だつて、えーと、 7 「

「 7将の1人とも言つていました」

名前を忘れた様なので助け舟を出す。

「 7将か。という事は、あと6匹はいるという事か。とりあえず、まずはそのスライインとこう7将について詳しく述べて聞こうか」

隊長がそう言つので、俺はスライインについてできる限りの情報を提供した。

7将の中では1番弱いと言つていた事や、俺との戦闘の様子などについてできるだけ詳しく説明した。

俺が話し終えると、隊長は「成る程」と言つた。  
そして、

「修治君」

隊長はとても真剣な目をしていた。

「はい」

俺が返事をすると、真面目な表情のまま続けた。

「 いくら魔物を殲滅するためとはい、一人で戦つたのは賢明ではなかつたよ。今後は1人で戦おうなどという事はしないでくれ」

「

「誰かを守りたいのは分かる。だけど、君が死んでその人達を泣かせては 意味がないだろう？それに人手不足のGSSCは隊員が減るのは好ましくないしね」

隊長は最後に茶化す様にして笑つた。  
俺はそれに一言返した。

「 はい」

俺が死んで、泣かせたら意味がない、か。

今思えば、1人で戦うのは危険だつた。  
勝てたから良かつたものの、もし死んでいたら、本当に誰かを泣かせていたかもしれない。

「次に7将などと戦う時は、誰かと多数で戦つてくれ。今日君を読んだのはチームを組んでもらうためでもあつたからね」

「分かりました」

俺がそう答えると、隊長は、よし、といつた風に頷いた。  
そして、再び話を切り出した。

「それで、これも重要な話なんだけど 。修治君、次に7将が出た時戦つてもらえないかな？」

「え？」

思わず間抜けな声が出る。

でも、本当に驚いたのだから仕方ないだろう。

「ああ、さつき1人で戦うなとか叱つておいて身勝手かもしれないけど、君に頼るしかないんだ。君の能力は間違いなくGUSCが把握している中で最強だ」

「ええ、いいですよ」

特に迷いもせぬ答える。

もう既に1人倒しているのだ。俺にとつては乗りかかった船のようなものだ。

すると、隊長は意外といった風に聞いてくる。

「本当にやつてくれるのかい？」

「やつ言つてるじゃないですか。どうして疑うんですか？」

少し不満なので聞いてみた。

「いや、GUSCに入つてほしこと言つた時はすぐこて答えてくれなかつたからね」

「はい、全くその通りで」やがてます。  
返す言葉もござこません。

だが、

あの時はあの時だ。

確かにあの時は自分の安全だけを優先していた。  
だが今は守りたい仲間がいる。自分より優先すべき仲間が。

だから、今度は即答した。

俺がしばらく沈黙していると、隊長は少し微笑んで話し始めた。

「引き受けてくれてありがとう。では、君を中心として対7将の特別部隊を編成しようと思つんだが

「え、ちょ、ちょっと待つて下さー！」

「？ 何かな？」

少し引っ掛かる所があつたので話を止める。

「俺を中心にしてビビーう

疑問を口にする。

すると隊長は答えた。

「あー、分かり易く言つて君が部隊長つて事だよ

「マジ？」

「ああ、マジなのか。

俺、宮野 修治は本田をもつて平社員から部隊長に昇格しました。

錦織 AHDH 　錦織ではなくハーレムですか？（前編め）

短いけど書けましたー！

よろしければお読み下さご。

## 部隊A-H-D-H-I 部隊ではなくハーレムでは？

「さて、部隊長は君なんだけど、他のメンバーはどんな人がいいかな？」

はあ、俺が部隊長つてのは確定なんだな。  
えーと、どうしよう。

どんな人がいいだろうか。遠距離支援型とか？  
というか、知らない人達といきなり組むのは気まずいな。  
恐らくは俺より年上の人達が部下になるだろうし。

「私が入る！」

悩んでいたら声がした。  
声の方を見ると光だった。

「うーん、そうだね。戦力としては十分だし、いいか」

「やつた！」

隊長は勝手に了承していた。  
ま、良いけど、別に。

「私も入るぞ」

ん、リリイも入るのか。

「某も」

ナナもか。

「皆入るの？じゃあ面白そうだから私も入るよー」

ああ、平井さんまで。

「いいんですか、隊長？」

「いいんじゃない？」

何かあつたりと許可がおりた。

「じゃあ、特別部隊は修治君、光君、リュミール君、N.O.、平井君の5名構成で決定つて事でいいね？」

「はい」

この5人か。

案外良いかもしね。

少なくとも知らない大人と組むより断然いい。

でも、俺以外全員女の子つて 軽くハーレムじゃね？

まあいい、それについては考えないようにしよう。邪念退散！

兎も角、これでメンバーは決まりだな。

まだ話す事はあるのかな。

そう思つてはいるが、隊長が話し始める。

「あ、それと、7将以外の知性を持つた魔物の対処もしてもらひつつ

もりだけど いいかな？」

今更気を使う必要ないだろ。

「」の隊長、変なところで律儀だな。

「はい。それと、スラインは自分達の事を“魔族”と呼んでいました。知性を持つ魔物の呼称はそれにしませんか？」

とりあえず提案してみた。

すると隊長は少し考える様にして言った。

「よし、じゃあその呼称を採用しよう！」

更に隊長は続けて言った。

「ついでに、特別部隊の名称は対魔族迎撃特別部隊にしていい。」

対魔族迎撃特別部隊か。

無駄に長いくせに意味はめちゃくちゃそのまんまだな。

よし、G.S.S.Cみたいに略称を考えよう。

10分考えて（いきなり黙り込んだ俺を皆が不信がつたが気にしない）、思いついた。

“Anti Intellectual Demon Intercept Units”の略でA.I.D.I.Cというのはどうだろ。実は口で言うと大して短くなつていないが、書く時は楽なのでいい気がする。

せっかく考えたので皆に提案してみる。

すると、「まあ、いいんじゃないかな」的な感じで可決となつた。

するとそこで、隊長が口を開いた。

「それじゃあ、AHDHUの門出を祝つて、パーティーでもしようか」

本当、パーティーとか好きだな、この人。

結局その日、隊長に付き合つて皆で部隊結成を祝つてパーティーをした。

まあ、何だかんだ言つて楽しかつたよ。

## 訓練 鬼教官は悪魔かっ！？

AIDHU結成翌日。

「AIDHUかー」

「ん？どうした、修治」

AIDHUについて考えていたら、いつの間にか独り言を言つていた様で、リリイが疑問に思つて聞いてきた。

とりあえず答えないとな。

「いや、GSSUに入つてまだ間もないのに特別部隊に入つて、しかも部隊長なんかになつちゃつていいのかなー、と思つて」

「それだけ隊長が君の事をかつてくれてているという事だらう。いい事ではないか」

リリイが、リリイのくせに優しい事を言つてくれる。

まあ、リリイの言つてるのはそういうなんだけど

「でも、7将を倒す部隊だぞ？一番弱い奴での強さだ。他の奴らはどれだけ強いか知れたもんじやないよ」

正直、100%勝てるところは無い。

そう言つと、リリイはポンッと手を打つた。

「ならば、今日から戦闘訓練を開始しよう。」

戦闘訓練？

『一。』

俺が「何ソレ？」とぽかーっとしていると、近くにいた光と平井さんがビクッと反応した。

「リリイ。私、今日委員会の仕事があるからつーじやあー！」

「わ、私も保険委員の仕事が！じやねつ」

2人はそう言つと疾風の如く去つていった。今のは速度、100mを8秒台で走つてたな。

「あの2人は出られんか、残念だ。では、修治とナナは放課後、本部地下にて訓練をするぞ」

ふーん、あの建物地下あるんだ。

あ、それと。

AIDIU結成に合わせて、皆、ナナの事をN.O.・7ではなくナナと呼ぶ事にした。

これは、パーティーで決まった事だ。

学校でもそう呼ばなきゃならないしな。

ナナと呼ばれたナナはどこか嬉しそうだった。

あと、俺がナナと呼ぶと、とても嬉しそうだった。

何故？俺はいつもそう呼んでるの。 というか、俺が呼ぶといつも嬉しそうだな。

何故だ？

ま、いいか。

兎も角

あれ？

話題なんだっけ？

。

あ、訓練だった。

「いこよ、やあひつ」

何も考えず了承する。  
まあ、いいだろう。

すすつ。

「修治、『愁傷様』

をさつ。

？

何か光が一瞬だけ来て、ご愁傷様って言って、また一瞬で去つて  
いった。

何なんだ、本当。

そして、本部地下にて。

俺は光の言葉の意味を知る事となつた。

俺とナナはリリイに連れられて地下へと行った。

地下はなんとトレーニング施設となつていた。しかもやけに広く、陸上競技場2つ分の大きさはあつた。

そしてそこでは隊員達が汗だくになつて訓練に励んでいた。ムサイ、暑い。

「リリイさん、来て下さつたんですね」

体育会系つて感じの隊員がリリイに声をかける。  
だからムサイって。

「どこまで終わつている?」

「はい、ステップ5までです」

隊員はリリイの問いに答える。

「そうか、では

リリイはその返事を聞くと、上着を脱いで動きやすい格好になつた。

そして手には、どこから取り出したのか、いつの間にか竹刀が握られていた。

その状態でリリイは全体に声をかける。

「全員、注目!」

リリイの大きな声にトレーニングルームにいた人全員が訓練を止め、一斉にリリイを見る。

何この統一感。

リリイって教官か何かなのか？

「皆、トレーニング中すまない。実は今日、新しく出来た部隊AI DIUの訓練を行う。皆には少し付き合つてもらいたい」

『Y e s , s i r !』

揃つて返事する隊員達。  
もう、何か軍隊みたいで怖い。

「それでは、宮野 修治、ナナを加えて、ステップ1から始めろー。」

『Y e s , s i r !』

イエッサーって イギリスト？  
ま、この際どうでもいいや。

バシッ！

そんな事どうでもいい事を考えていると、リリイの竹刀が地面を叩いた。

「修治。何をしている！？さつとステップ1から始めろー。まずはこの部屋を全力ダッシュ150周だ！」

は？

150周？

これ、1周あたり800mくらいあるぞ？

しかも全力ダッシュ？

あー、ゆー、おーけー？

うん、ようやく光の言つてた事がわかつたよ。  
分かりたくもなかつたケド。

「聞いているのか？返事をしろっ！」

考え方をしていたら怒鳴られた。  
よし、返事しよう。

「はーい」

「返事はイエッサーだつ！貴様、それでも軍人か！？」

軍人じやねえよつ！

つつか、キヤラ変わりすぎだろリリイ。

まあ、仕方がない。

言う通りにしよう。

でないと、後が怖いからな。

「いえっさー」

俺は鬼教官から逃げる様にして走り出す。

だが、一周していくと、

「何をノロノロと走っている！ それでは歩きと何ら変わらん！」この  
クソ虫がッ、芋虫の方がまだ早いぞ！？ 私は全力ダッシュと叫んで  
いるッ！ できないのなら殺虫剤でも噴射するぞ！」

ああ、酷い。

どんな鬼教官だよ。

そして俺は果てしなく長い150周の2周目を走り出すのであつ  
た。

## 模擬戦 vs ザコキャラ

結局、なんとか150周走りきつた。あまりにきつかったので、バレないよう魔力のアシストを使って走った。

「終わったー」

達成感と疲労でその場にへたり込む。すると、リリイがやってきて言った。

「どれだけ時間をかけている、遅い！」

酷いよこの人。

頑張つて走つたのに。

リリイの叱責に返事をする気力はなかつた。すると、リリイは続けて言った。

「では、次は

え？

次つて！？

もしかして、まだあるの！？

「模擬戦をしよう！」

マジっすか。

「うして、模擬戦が始まった。

俺の対戦相手になつたのは、えーと 名前知らないや。GSS

C職員Aさん（仮称）だ。

Aさんは身長2m程の大男でめっちゃ強そつだつた。

俺が誰と戦おうかと迷つていたら、「手合わせ願おう」とか言ってきて、戦う事になつた。

何この人。むさいんですけど。

「それでは始めます。試合、開始！」

カアアン。

ゴングが鳴らされた。

ボクシングなのか、これ。それともプロレス？

「あのー、ルールって何ですか？」

一応確認する。

そもそも競技名さえ知らないし。

「何でもありのルールだ！がつはつはつ。では、まずこいつから行かせてもらうぞ」

Aさんはそう言つと手を上に掲げる。

すると、Aさんの掲げた手の上に巨大な炎の球体が出現した。

見た目は近接格闘タイプっぽいのに火球かよ。

「どうだ、俺の能力は。まあ、火力は調整してあるから死にはせんだろう。沙耶禍ちゃんの能力のお世話にでもなるんだな。がつはつはつ。それでは、くらえつ、ファイアーボ

Aさんが能力を自慢してきた。  
そして火球を放とうとした所で、

「わあー、おっさんすげえ！ 何それ！？ 魔法っぽくね？ かっけー」

俺はつい感動してしまった。

いや、だつてさ、火球ですよ？ ロマンを感じませんか？

すると、Aさんは放とうとしたのを止めた。

「え？ あ、そうか？ そうかそうか。お前なかなかセンスがいい。最近の若い奴にしては見る目がある。 リリイお嬢ちゃんなんて、『火の球？ ザコっぽいな。メカ？ せめて氷を出せ、ヒヤとか』なんて言つじ。くそつ、どうせ俺は（泣）」

Aさん いい歳したおっさん は泣き始めてしまった。  
どうしよう、慰めるか？

「あー、ほら、俺はいいと思つよ、うん。炎つてかっこいいじゃん。  
それに、主人公キャラがよく使つし。な？ ほら元気出せよおっさん」

「あ、ああ。ありがとつ よしつ、戦闘再開だつ！」

おつれ もとじ、Aさんは何かを吹つ切るよつたやう言つた。

「いくぞ、もう遠慮はせん！全力の、**火球！**<sup>ファイアーボール</sup>」

ドガアアン。

障壁で防ぐ。

実は最近、言わなくともスマーズに出せるようになった。

「やつたか！？」

炎と煙でこちらが見えないおっさんは言った。  
そのセリフはどうかと思つよ？

よし、どうせならかつこよく登場しよう。

ズウウウウン、ズウウウウン。

障壁と、強化した脚力で足音を大きくして炎の中から出て行く。  
唖然としたAさんと田があつ。

「馬鹿なつ、直撃した筈だぞ！？」

とても驚いているAさん。

「くそつ、もう一度！」

再び放たれた火球。

ドガアアン。

また障壁で防ぐ。

今度は防ぐ所が見えたらしい、Aさんは言った。

「A・・・フィールドー?」

やつぱつさつきのモヒヴァン リオンのネタだったんだ  
そもそもこの人めんどくさいな。

障壁を生成、そして殴り飛ばす。  
ダーッッ!

Aさんは吹っ飛んで壁に当たって気絶した。  
何か一方的だつたな。ごめん、Aさん。

カアーン。

「勝者、富野 修治!」

審判が、宣言する。  
すると、リリイが歩いてきた。  
そして言った。

「次は私とするが」

## 模擬戦 vs ザ・キャララ (後書き)

この話はノリです、ノリで書きました。

なので、やけに が多くなりました。

つまらなかつたらすいません。

PV壹万達成です！

やつたー。

皆さんあつがといへりぞりこます！

わい、これからも頑張つますよー。

つて所で「報告」。

何か、もう一つ書き始めてみました。

“厨式病患者の妄想と奇跡”という小説を連載し始めました。  
暇で興味の湧いた方はそちらもどうか読んでみて下さい。

「え、やだけど?」

当然だろ?。

こんな鬼教官となんて模擬戦したい奴はいない筈だ。

「拒否権はない。そもそもお前がやりたいかな? 関係ない」

えー。

そんなご無体な。

いいじやねえか。

そんなにやりたいならやつてやりあ。  
全身装甲でフルボッコにしてやんよ。

「ちなみに、全身装甲は使用禁止だ。あれに勝てる奴などいないだろ? からな」

ちくしょう、リリイのやつ俺の心を読んだのか?

ひつして今度はリリイとの模擬戦が始まった。

さて、ポケ〇ンのジム戦よろしくといった風にバトルフィールドで向かい合つた俺とリリイだが  
正直、俺は勝てる気がしなかつた。

何故かつて？

だつて、リリイさん、目が怖いんです。  
完全に目が据わつてます。

あれは数多くの戦を生き延びてきた戦士（ソルジャー）の目だ。実物を見た事なんて無いけど、多分あんなかんじだろう。

兎も角、こいつやって敵として向かい合つとリリイの雰囲気がハンパなく怖い。

なんか、こう、経験の差の様なものを感じさせられる。

あれに勝てだつて？  
無理無理無理無理無理無理無理、絶対無理。  
だけど 戦うしかないんだよな。

そんな俺の葛藤を余所にリリイは自分の得物を鞘から抜きはなつた。

シユラアアアン。

そんな擬音語が似合う音を響かせ抜かれたそれは、一振りの美しい日本刀だった。

始めてリリイに会つた時の荒々しいバスター・ドソードとは違い、精錬された力強さを感じさせられた。

「やはり 刀は良いな」

リリイは俺にお構いなしでそつ呟いた。

何かこの人怖い。

「日本刀?」

聞いてみる。

「つむ、銘は正宗だ」

すると、リリイはそつ答えて、試しに切り払う。

ブウーン、ブウーン。

わー、切れ味良さそう。

まあ、その切れ味を自分の体で味わう事のないよひよひよひ。

カアアン。

ゴングが鳴った。

「では、いくぞっ!」

そういうリリイは瞬間移動で一気に聞合<sup>テレポート</sup>いを詰めて俺に切りかかる。

そのくらいは予測出来ていたので、俺はプロテクトを使つまでもなくかわす。

が、

「燕返しつ!」

ヒュン!

「つー

ガチイイ！

いきなり正宗が切り返された。

俺は障壁を生成、青白い障壁が斬撃を弾いた。

「つ、ちつーお返しだ！」

障壁生成、そして殴る！

が、そこにリリイはもついない。

「後ろかつ！？」

気配を感じて振り向く。

「遅いっ！」

リリイは刀を頭の右に直立させて構えていた。

「花車！」  
かしゃ

リリイの斬撃が迫る。

俺はそれを障壁で受ける。

そして、そのまま殴るが、またもやリリイはいなくなっていた。

次は 右後ろかつ！

見ると、切り下げる放とつとするコリイがいた。

「もひつた！」

障壁を生成、リリイに叩きつける。  
が、とてもない違和感。

リリイがあんな溜めをつくるか？

「添截乱截！」

そして、後ろから聞こえるリリイの声。

「くっ、あ、全身装甲ツ！」

俺は焦つて全身装甲を発動させた。

そして次の瞬間。

パキイイイイン！

俺の障壁に当たつた正宗が音高く砕け散つた。  
そして、フィールドを静寂が包み込んだ。

「正宗が、折れ た？」

茫然とするリリイ。

ヤバい。謝つておこう。

「あー、その、すみません」

うん、素直に謝るのは大切な。

するとリリイは俺の方を見て、折れた正宗を見て、もひつ一度俺の方を見て、

「このひ、馬鹿者があああ！何故全身装甲を使つた！？私は使うなと言つただろひつ！」

怒鳴つてきた。

まあ、悪いのは俺なんだが。

それでも、あの状況では仕方がないよつな氣アーマーがする。

「あの、悪かつた。けど、使わないと殺されると思つて」

これ、本當です。

“死”を間近に感じました。

「平井がいるであらひつ！」

「今日は帰つたじやん」

「

黙り込んでしまつた。

「あのー、えーと、リリイさん？」

「

無言で「ひかりを睨んでくる。

「

「

くせり、だめだこの空氣  
耐えきれない。

「その 悪かっただって、許してくれよ。何でもあるからー。」

「ん? 何でも、と言ったか?」

なんか食らいついた。  
凄い嫌な予感。

「あ、ああ、言つたけど

「何でも頼んでいいのだな?」

ああ、何て言われるんだろう。

そして、俺が不安に思つ中、リリイは口を開いた。

## お出かけ テート だつたら良いの△

リリイは言った。

「では、不死屋の特大パフェDXを奢つてもらおうか」  
「なんだとおお！？」

俺は驚愕した。

だが、別にめっちゃ値段が高いといつ訳ではない。まあ、一万円  
はするが。

俺に対する罰だとしたら思つていたよりもかなり軽い。

では何故俺が驚いたのか。

いや、驚いたというより感動だな。

俺はリリイの勇気に感動したのだ。

不死屋の特大パフェDXを食べるといつリリイの勇氣だ。

不死屋というのはレストランも兼ねてやつているお菓子屋だ。  
そして、特大パフェDXは“料理も含めて”その店で最大ボリュームの殺人級パフェだ。

通常、1人では食べない。

それをリリイは食うと言つのだ。

まあ、別に良いけど。本当に食えるのかな？

「分かつた、いいよ」

俺がそう言つとリリイは、それじゃあ、と口ひびきを言つ、そして。

「では、今週の日曜日は空けておけ。その日に不死屋にいくが。  
それと、他の連中には、その 『いつなよ?』

「何で?」

「あー、それはだな、えー、あれだ、あんなについて来たら、その  
一、『面倒だらう?』な?」

「うか?」

別に俺は、皆がいても楽しいと思つけど。

と、俺は思ったのだが、何かリリイがやけに必死なので、まあ、  
あえて言つ事もないし、と思つ。

「分かつた」

「そ、そつか。では日曜日だぞ?忘れるなよ?」

俺にそう念押しして、リリイは去つていった。

それにも、特大パフェDXか。

想像していたより安くついたが、少々痛い出来だ。

まあ、しようがない。

帰るか。

俺もリリイの向かつた出口の方へと足を向けた。  
と、その時。

「こっ、てええ———！」

足に痛みが走った。

見るとそこには折れた正宗が。

「お返しだ」とでもばかりに俺の足に突き刺さっていた。

ちくしょう。

結局、平井さんの世話になつただな。

「はあ」

溜め息を一つ。

そして俺は訓練所を後にした。

日曜日。朝。

リリリリリリ。

目覚まし時計に叩き起しきれる。

眠つてたいなー、という邪念を振り払つて布団からもぞもぞと抜け出した。

なんせ、あのリリイの事だから約束を破つたら殴り殺されて蹴り殺されて斬り殺されて となりかねない。

俺はまだ生きたいんだ。

という訳で、朝食を取つて歯を磨いて服着替えて etc. といつた事を全て一時間で済ませる。

支度、完了！

そんじゃ、出かけますか。

ん？ なんでパフェを驕るだけでそんな早く出かけたのかって？

実は、あの後。

「実は、ついでに少し付き合つて欲しい事があるんだが」

「え？ めんびく

ザンツー（足元にリリイの刀が突き刺される）

「何でもする、と言わなかつたか？」

「はい。 その通りで」

「という事があつたのだ。

待ち合わせ場所は家を出て15分の所にある公園になつた。  
時間に余裕があるのでのんびり歩いて公園へ向かう。

今日も景色が綺麗だな、この町は。

公園に着くと、リリイはまだ来ていなかつた。  
まあ、当然か。

一応、余裕をもつて時間前に来たからな。

しばらぐしてリリイが来た。

普通なら、

女の子「またせちやつた? ゴメンねつ」

俺「いや、俺も今来た所。全然待つてないよ(キラツ)」

と、なる筈だが

リリイ「待たせたな。まあ、私を待つのは当然か。むしろ私を待たせるなどありえないからな」

俺「

と、なつた。

うん、まあ、期待してた訳じゃないよ。  
リリイだしな。

「何をぼけつとしている。行くぞ」

かなしいかな、これが現実。

リリイに連れられて着いたのは

「刃物全般取り扱い?」

刀などを売つてゐる店だつた。

「ああ。ここの間誰かさんが壊した正宗の代わりの刀が欲しいと思つてな」

「いめんなさい」

「はは。過ぎたことだ。私はこれっぽっちも貯にしていないで、これっぽっちも」

本當か？  
甚だ疑問だ。

しかしまあ、沢山の武器があるな。

えーと、あれは包丁か？

刃物全般取り扱いだからそういう物もあるんだな。

あれを武器にする人はいないと信じたい。

しばらく店内を見渡す。

と、リリイが声をかけてきた。

「で、代わりの刀なんだが、修治はどれが良いと思つ？」

どれが良いかと聞かれてもなあ。

とりあえず、田についた刀を指差す。

「あれなんて、どうだ？」

俺が指差したのは、じく普通の刀。

だが、俺はその刀からなにかを感じた。  
こいつは何かもつている、と思った。

「お客さん、流石ですねえ」

ん？

誰だ？

見ると、中年の、だが品のいいおじさんが立っていた。

「それはねえ、天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神という刀です」

アメノオハバリノ カミ？

お出かけ テート だつたら良いのに（後書き）

テストがfinishedです！

やたーーー！

で・す・が、  
すいません、実はテスト期間中にストックを切らしてしまいました。  
まあ、元からあつてないようなものだつたんですがねw  
ま、ちよつちよづつ増やしてこきますよ。

## 魂の加工　田舎はまむらへ行つた？

「アメノオハバリノ　力ミハヘ。」

「ええ、そうです。それが、その刀の名です」

アメノオハバリノカミ  
天之尾羽張　神。

聞いた事がある。

確かに、日本神話にでてくる、柄が拳10個分もの長さの刀だ。確かに、この刀はかなり柄が長い。もしかしたら本当に拳10個分ほどあるかもしれない。

だが、実物という事はないだろ？

なにせ、神話にでてくるような刀だ。実在しないだろ？仮に実在したとしても、こんな綺麗なかたちで現存しているはずがない。

そもそも、本物ならこんな店には置いていないだろ？

「　　」こんな店で悪かつたですね

「ほそり、おじさんはそう呟いた。

よく見ると、どうか今まで気づかなかつただけで分かりやすかつたのだが、おじさんは首から店員のカードのような物をぶら下げていた。

それに、よく見ると店長と書いてある。

「あっ、す、すいません。そういうつもりで言つたんじや。

というか俺の心でも読んだんですか？」

そう聞くと、店長さんは苦笑して答えた。

「心を読むも何も、君、考へてる事を口にだしてましたよ」

マジか。

気づかなかつたな。

「えつと、ビーハロから聞いてました?」

「柄の長さが拳10個分つて所からですよ」

そうか、なら話は早い。

一々、考へてる事を説明し直す手間が省けるな。

「それなら大体全部ですね。じゃあ、全部聞いていたつていう前提で話しますけど、あの刀、本物じゃないですよね?」

まあ、普通に考へて本物な訳がないのだが、つい確証が得たくなつた。

だが、俺の予想に反して、店長さんは言つた。

「本物ですよ」

は?

「それって 神話の刀から名前をとつたとか?」

「いえいえ、これが日本神話の天之尾羽張アメノオハバリーカミ 神です」

What do you mean?

理解不能だ。

「 いうか、このおっさん、俺のことからかってんだろ。本物な訳ないじゃないか。」

「 信じてなさそうですねえ」

「当たり前だ。逆に誰が信じる?」

俺は店長さんを疑いの田(どんな田だらう)で見つめる。すると店長さんは驚くべきことを言った。

「 実はね、わたしもGIGANTICのメンバーで、能力を持つてるんです」

「ふーん、なるほど。」

「 つて納得するか?」

何で店長さんが能力持つてると本物の神話の刀が店にあるだよー!おかしいだろー!筋トレをしたら頭が良くなりました、つていうのと同じへらいこかしい!」

「 え?納得できませんか? あ、そうか。能力について説明しないと」

と、いう訳で店長さんの説明をうける事になりました。で、その話によると、店長さんの名前は浦島 桃太郎(本名:らじい)。年齢は秘密だそうだ。

そして、肝心の能力は「 え? 納得できませんか? あ、そうか。能力について説明しないと」

という能力らしい。例えば、鉄とその他の素材があれば鉄の剣でも戦車でも、量によつては要塞も作れるということらしい。

だが、勿論鉄から銀の剣は作れないしその逆も無理。あくまでその素材を使うものらしい。

また、既存の物を作る場合、原子1個の狂いも無く本物を再現できるらしい。

ふーん、凄いな。  
でも

「それでどうして神話の刀が作れるんですか？」

俺がそう聞くと。

「良い質問です、よくぞ聞いてくれましたー。」

ああ、聞かれるのを期待してたんだな。

「そもそも、わたしが素材を加工する時に何を消費するか分かりますか？」

質問に質問で返すなよ。

まあいい、えーと、能力を使う訳だから

「魔力、ですか？」

「その通りです！」

浦島さんは望む回答が得られたようで、嬉しそうにそう答えた。  
そして解説を続ける。

「普通は、今言つたように魔力を“加工”に使うんです。ですが、魔力を“素材”にしたらどうなるでしょうか？」

まさか、それで神話に出でくるような刀を？  
だが、までよ。

「どうやつて魔力なんでものを素材にするんですか？」

そう聞くと、浦島さんは、おや?といつた顔で、しかしどこか嬉しそうに答えた。

「そんな質問をする人は初めてですよ。いやー、君は面白い人ですねえ。ええつと

「富野 修治です」

「修治君。ともかく面白い質問ですね。実はね、一番苦労したのはそれなんですよ。実はわたし、一度、生き物を素材にした事があるんです。何故かというと、モノからはいくらやっても生き物が作れなくてね。その時はバッタを使つたんですが 何を作つたと思います？」

「ええつと、他の虫ですか？蝶とか」

いきなり話が変わつたことに戸惑いながらも、とりあえず答える。すると浦島さんは、いいや、と言つて答えた。

「それがねえ、他の素材も使いましたが、犬が作れたんですよ。バッタから犬。肉体的には、バッタより本物の犬の肉の方が死んでい

たとしたも明らかに適してゐるんです。ですが、バッタで作れた。これが何を意味しているか、分かりますか?」

今日何度もかかる質問。

その答えを考える。

そして、重大な事に気がつく。

魂を素材にした?

「まさか 魂を素材に?」

そんな事ができるのか。  
できるような気がする。いや、恐らくできるだろ?。  
物理法則など関係ない。俺達の能力はそういうものだ。  
だが、それでも、  
魂を素材にして生き物を作り替えるなど非常識すぎる力だ。

「ええ」

浦島さんは短くそう答え、また一拍おいてから次の言葉を紡いだ。

「魂も、加工の対象なんです。ですから、魔力が素材として使ってもおかしくはないでしょ?」

突拍子もない話だ。  
だが、

「それが、 真実、か」

「ええ」

まるで俺の考える事を理解するよつて、浦島さんは答えた。

俺らのこの能力、俺が思つていたよりももつと、ずっと凄い、そして恐ろしい物なのかもしれない。

その後、結局リリイがその天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神を購入。

俺が浦島さんに、「神話の武器なんだから何か凄い特殊効果とかないんですか？魔力も使つてるし」と聞くと、「ありますよー」と教えてくれた。

それによると、

天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神

刀

特殊効果

【火無効】

【神殺しの刀】

となるらしい。

よく分からなかつたので詳しく聞くと、

【火無効】

これは、文字通り、火が効かなくなるという効果。火の神カグツチをこの刀で殺した事により、この刀は火を制したため、らしい。

### 【神殺しの刀】

この効果は、同じくカグツチを殺した事による。  
神を殺した刀で斬れない物はないぜっ！という効果。  
俺の障壁も斬れるのかな？  
怖いから考えない事にしよう。

そして、店を出た。

あと、ちなみに。

入る時は気がつかなかつたが、看板に店の名前が載つていた。

“刃物の店 竜宮ヶ島”  
浦島 + 桃太郎つて訳か。

覚えておこう。

今度俺も何か買いにこようかな。必要性はないけど。

## 不死屋 超弩級特大パフュームのお味は？

リリイは竜宮ヶ島を出てから、新しい刀のおかげで、機嫌だった。笑顔で軽くスキップして買つたばかりの刀を抱えて歩く様は、さながら玩具を買つてもらった子供のようだ。リリイにも可愛らしい所があるんだな。

そんな事を考えて前を行くリリイを眺める。

「何を見ている」

すると、なんか咎められたので、とうあえず思つていた事を口に出す。

「いや、リリイにも可愛らしい所があるんだなー、つて」

するとリリイは、ボツと一気に顔を赤くした。

「は、 や、 そ、 そな、 可愛らじこなどと、 ばつ、 馬鹿にしているのかつ、 私は軍人だぞつー」

見事に慌てている。

なんか、いじりたくなつてきた。

「馬鹿になんてしてないよ。 可愛い軍人をんつ

やう言つて頭を撫でてみる。

「ひえつー? うあ、え? はう」

あ、言語機能が壊れた。

それと、ボフツと音を立ててリリイの頭が爆発した。

それからリリイがやけにおとなしくなった。  
いつもこのへりこおとなしいといいんだが。

「えーと、じつするへもつ蜃だから不死屋に飯食いに行く?」

俺がそう聞くと、もつすつかりおとなしくなつたりリイは、いへ  
んと頷いた。

えーと、俺、そこまでやつてないよ?  
これ、いつになつたら治るんだ?  
まあ、いい。とりあえず不死屋へ行こ!。

そんな訳で、やつて来ました不死屋。

「何名様ですか?」

「2名です」

店員さんと定番のやり取りをして、席に案内される。

なんか、店員さんが微笑ましいものを見る目で見てきて、一番奥  
のすいている席に案内された。

これ、絶対カツプルとかだと思われるよな。

えーと、まずは何か注文しよう。

「リリイは特大パフュームDXだから他には何も頼まないだろ?」

一応確認する。

勝手にたのんで怒られてはたまらない。

「ん、そうだな。 それと、その、修治も何もたのむなよ」

謎な事を言つてきた。

俺に飯を食うなってか?

「何でだよ。自分だけ食つて俺には何も食わせないつもりか?」

リリイにそう聞く。

他になんか考えられる理由はあるか?

いや、恐らくこの理由だろ?。

リリイは正宗を折られたのをまだ根に持つてゐるに違いない。

そう考へてみると、リリイは答えた。

「いや、その、もうじやなくてだな、」

「そうじゃない?」

「どういう事だろ?」

「その、私一人ではパフェを食べきれないから で、食べよつと 2人

はい？ 今なんと？

2人で食べると言いました？

「 ともかくつ、それで、修治も余計なものは食べなこよひにして  
ほしいのだ！」

対する俺は理解が追いつかない。

リリイが、 “あの”リリイがパフュを2人で食べようなどと言つ  
ている？

これは本当に現実か？

そんな事を考えて、じぱらへ俺はリリイに返事できぬいでいた。  
すると

「 ぐずつ。答えてくれないが、嫌なのか？ ぐすん、修治は私と  
パフュを吃べるのが嫌なのだな？ つづ、ぐしゅ、ぐすん」

「 」

まで、今のはリリイの声か？

恐る恐るリリイを見ると ほぼ半泣きの涙田で、不安そうに俺  
を上田遣いに見ていた。

これは。これは

「 可愛かぎれい」

「え？」

普段、怖い感じの氣の強いリリイが、こんなにも、こんなにも。

か弱そうにしているだなんてっ！

可愛い通り越して、もう、ヤバい。

「安心しろっ！ちゃんと一緒に食いつてやるー。」

だから、そんなリリイの頼みを断れる訳がなかろう。

「そ、そ、うか。良かつた」

ほつとしたようなリリイ。

うーん、それにしても

「リリイ、今日どうかしたか？なんかいつもと違つて様子が変だぞ  
？」

気遣いの心。

うん、日本人として大切な、これは。

と、心配してみたのだが。

「うう、それは、修治がいけないのだ」

そう言つて恨みがましく見てきた。  
え？ 何で俺のせい！？

とりあえず場の空気をかえたいな。  
よし、注文しちまうか。

ぴーんぽーん

「『注文はお決まりですか』

ベルを鳴らすと店員さんがやってきて注文を聞いてきた。

「特大パフェDXを一つ」

「以上で？」

「はい、以上です」

「では、特大パフェDXをお一つでよろしいですね？」

「はい」

そして、店員さんはまた微笑ましげにしながらカウンターの奥へ去つていった。

凄えむず痒いんですけど。

そして、待つ事わずか一分、特大パフェDXがやつてきた。  
デカいとは分かつていてが、実際に見ると凄い。これは、  
人でも食いきれるか不安になる量だ。

それと、最初からスプーンが2つ突き刺さっている。  
やけに後ろが気になるのでちらりと見ると店員さんが数名、こそ  
こそとこちらを見ていた。  
この状態で食べるのか。恥ずかしいな、非常に。

すると、リリイは更に驚くことを言いだした。

「その、どうせだから、食べさせあつたりしてみないか？」

うん、まず落ち着け、俺。  
つてか、どうせだから、つて何がどうせなんだよ？  
とか、どうでも良いことを考えて氣を紛らわす。

「だ、駄目か？」

その一言がとどめだった。  
そんな風に言われたらねえ、やりやあ断れませんよ。

「駄目じゃない！駄目な訳がない！」

と、いつ訳で、世に囁つて、あーんなるものをする事になつた。  
なに〇〇してんだ俺。その場のテンションつて怖え。

「では、まずは、その、修治から食べさせてくれるか？」

そう言われ、俺はスプーンを手にとつて、ひとすくい分のパフェを  
掬う。

そして、リリィの口へと運んだ。

「はー、あーん」

「あ、あーん」

ぱくり。  
ぱぐもぐ、ぐぐぐ。

その分を食べ終わると、リリィはスプーンをとつて囁つた。

「つ、次は私が食べさせる番だなつ！」

リリイも俺と同じようにパフェを掬つ。

そして、俺に差し出してくれる。

「修治、あーん」

「あーん」

ぱくり。

ん、うまい。

「じゃあまた次は

そんな調子で交互に食べさせあつこと30分。

遂に、特大パフェDXはその巨大な体積を全て失つた。

そして、リリイとの日曜日は終了した。

翌日、冷静になつて日曜日の事を考えてみた。

俺、何やつてんの？

竜宮ヶ島までは良かつた。

だが、特大パフェDXは絶対におかしい。

リリイも普通じゃなかつたし。

その事を学校でリリィに話すと、

「し、修治が変なことをいつから混乱していたのだ…もう昨日の事は忘れて… も、やつぱつされるな…忘れたら殺す！」

なんか荒れました。

というか、昨日のは混乱のレベルじゃなかつた気がする。  
けどまあ、いいか。

## プロメテウス&テイレシアス 漆いねスペコン（前書き）

リリィの出番が多くてナナの出番が少ない。

フラグ的にはナナの方が出番ある筈なのこ。

と、いう訳でこんな話です。べーべ。

## プロメテウス&テイレシアス 激しいねスパコン

リリイとの日曜日から数週間。

何故かナナの機嫌が悪かった。

ナナは感情の変化が少し分かりづらいやが、慣れてくるとけつこう分かるようになった。

他のやつらからは、なんで分かるの?と散々言われたが。

ともかく、ナナの機嫌が悪い。

だが、理由がわからない。

とりあえず、聞いてみるか。

「ナナ、最近機嫌悪そうだけど、どうした?」

「修治さんがリリイさんと一緒に、某達に内緒でお出かけをしていたので」

「ばれてた!?

でもなんで!?

「監視カメラに接続した所、そのような映像が」

怖いね、最先端技術。

でも、よく考えてみる。

俺は別に知られていい筈だ。

リリイが言つなどと言つからだめなように感じていただけだ。

しかし、ナナの咎めるような田（これも、皆からしたらこつもと変わらないらしい）がなんか罪悪感を感じさせてくるな。  
あ、そーだ。

「じゃあ、ナナも今度一緒に出かけよう」

ナイス提案だぜ、俺。

我ながら凄い考えだな。

しかし、3人か。パフェを食つのが楽になるな。

と、考えていた所で再びナナは言つ。

「その、修治さんと某で2人がいいのですが。リリイさんも呼ぶの  
でしょうか？」

少し恥ずかしそうに、また少し不安そうに（これも、皆からした  
ら普通に無表情らしき）聞いてくる。  
やはり、可愛い。

リリイも可愛いこと思つたが、やはりナナは可愛いな。  
これは もう、断れんだろう！

「ああ、2人で行こう。」

「はい」

次の田曜日も空けておくが。

そんな事もあつたのだが、田曜日から数週間、学校では普通だつ

たが、放課後はほぼ毎日ナナ、リリイ、光、平井さんと訓練したり魔物を駆逐したりという日々を送っていた。

そういえば、訓練で死にそうにもなった。

それは、リリイとお出かけしてから初めての訓練の時のことだった。

「修治、手合わせしる」

「きなりリリイに勝負をもちかけられた。

「どうしたんだよ、いきなり」

そう聞くと、

「アメノオハバリノカミ」の天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神なら貴様の障壁も斬り裂けるかと思つてな。なにせ、神を斬る刀だ」

あー、そういう事ですか。

いつか言い出すんじゃないかとは思つていた。

「どう訳で、セイツ！」

「うわっ、フ、プロテクト！」

ガシイイイ。

咄嗟に出したプロテクト。

それはちゃんと刀の刃を無傷で受け止めていた。

おー、神より強え。

「ぐつ、まさか防がれるとはな。まあ、修治なら有り得なくもないとは思つていたが。くそ、こうなつたら。　　おーい、ナナ、手を貸せ」

え？ なんでナナ？

そう思つてこらつちに、ナナがやつてきた。  
そして、リリイがナナに何か耳打ちする。

「はい、分かりました」

何かを了解するナナ。  
何を頼まれたんだ？ 気になる。

「さて、試合開始だ」

リリイが宣言し、試合が始まった。

試合開始と共に瞬間移動するリリイ。  
（テレポート）

が、甘いっ！

実は俺は対リリイ戦の為にリリイの行動パターンを完璧に覚えて  
いるんだ。

だから、今回は勝たせてもらひつゝ！

俺は、恐りくリリイが出現するであろう所を殴つづける。

しかし

スカツ。

「いない！？」

俺の拳は空を切った。

そして、

「！」

予想外の所にリリイが現れ

ザクツ。

「つ、ぎやあ————！」

暗転、意識がトんだ。

シユウウウウ。

謎の音。

そして激痛。

目を覚ますと、平井さんに治療されていた。  
蠢いて治る傷。シユールだ。

と、そこで視界に俺を刺した人物　リリイが映る。

「なんで斬つた！」

「つい、な

うわあ、さいてー。

というか、それよりも、

「どうしてあんな所に瞬間移動した？」  
（テレポート）

俺の一一番の疑問はそれだ

「おとこは得意には答えた

三、日本海の表示を三瀬川せん

いや、得意げにしても、それお前の手柄じゃないからな？

一  
ナ  
ナ  
頭  
い  
い  
な  
！」

そう詰めると、いつの間にそこへいたのかナナが答えた。

「先に考えるもの」と“盲田の予言者”がありますから」

「なにそれ？」

聞くと、ナナは説明をしてくれた。

その説明によると、先に考えるものと盲田の予言者は超高速高度  
演算思考コンピューターといひ、まあ、簡単に言つと凄いスーパー

コンピューターのようなものらしい。

先に考えるものはGSSC本部にあり、ナナは常にそれと通信を行っているらしい。

また、盲田の予言者はナナ自身に搭載しており、先に考えるものほどではないが、かなり高性能で、ナナの補助をしているらしい。

それを使って俺の思考を予測したのか。

そんなににかかれば俺の考えなんて簡単に分かつちまうな。というか、無駄使いじゃね？

そんな訳で、その日はナナの凄さを思い知った。

光の出番？

それは  
まあ、その内に。  
多分、あると思います。

## 大型魔物出現 して、その正体は？

突然だが、最近俺は思った。  
時がたつのは早いな、と。

スラインとの戦闘、GSSC入隊から早一ヶ月と一週間がたとうとしている。

その間、ほぼ毎日門をぶつ壊したり、リリイ（ナナの補助付き）<sup>ゲート</sup>にぶつ潰されたりして過ごした。

そして、悲しい事なかもしれないがそんな生活に慣れてきてしまっている自分がいる。

ぶつちやけ、何もない方が違和感を感じる。

そして今も、GSSCの任務で門をぶつ壊しすため、出撃していた。

「修治、行つたぞ！」

「おう！」

リリイと戦つていた群から数匹、俺の方へと魔物がやってきた。

「おりやあつー！」

拳には既に障壁を展開してある。

その拳で魔物を殴りつけた。

俺の拳が魔物の肉をえぐり、弾け飛ばした。

プロテクトで俺の拳には血がつくことはないが、やはり気持ちの

良いものではない。

それにしても、数が多いな。  
どうするか。

「修治さん、来ました」

困っていたらちょうど良いタイミングでナナがやつてきた。  
さすがだな、やはりナナは偉いぜ！

よしよし。

ナナの頭を撫でる。

最近分かったのだが、どうやらナナは頭を撫でられるのが好きらしい。

今も目を細めて気持ちよさそうにしている。

なんか最近、ナナの性格が子犬的なキャラになってしまっている。  
学校でも基本はいつも俺について来るし。

あ、でも他人には相変わらず心を開いてないっていうか、G S S Cの人に対しては多少ましだが、それ以外の知らない人（同級生含む）に対してはほぼ関わらない。

それ故、皆の認識では無口＆無表情で暗い人、となつていて、  
皆わかつてないなあ、こんなに可愛いのに。

話がそれだ。

「ナナ、門の破壊を頼む！」  
「ゲート

「はい」

ナナはキュイインと音をたててエネルギーをため、放つ。

ドガーンと、呆氣なく門は吹き飛んだ。

役目を終え、ナナが誓めてとばかりに見てくる。

「よくやつたな」

よしよし。

再びナナの頭を撫でる。  
ナナは満足そうだ。

それにしても、最近門の出現頻度が高い。  
スラインを倒したからか？魔族が焦っているのだろうか。  
だが、それにしてはあれ以降魔族に会っていない。ずっと魔物だけだ。

もうじき来るような気がする。7将の2人目とか。  
来ないで欲しいなー。けど、俺の嫌な予感つて当たるんだよな。

一抹の不安を感じた、その時だった。

先ほどまで門があつた場所に闇が渦巻いて、そこから禍々しい魔力が溢れでてきた。

『つー』

全員、サッとほぼ反射的にそちらを向く。

そして、その間にも闇は大きくなつてゆく。  
これは、

「あの時と同じだ」

「ゲートが、現れる。

「アーマー全身装甲！」

阻止、できるか？

唖然としている皆を置いて、闇の塊に突っ込む。

「つおりやあつ！」

だが、

スカツ。

俺は闇の塊には触れられず、むなしく反対側に突き抜けた。

闇は凄い勢いで渦巻き、大きくなつてゆく。  
もう、既に3mは超えている。

「ナナ、砲撃！」

「はい！」

キュイイイイイ。

一秒ほど溜めるナナ。

そして、恐らく放てる最大の砲撃を放つた。

放つ光に目をやられ、鼓膜も爆音で危うい。  
数秒後、よつやく目を開く。

正直、これなら効くだろうと思つた。  
心中で「やつたか！？」と思つた。

「これはダメか。

が、しかし。

闇の塊は全く影響を受けていなかつた。  
どうやら、この状態では干渉できないようだ。悔しいが門が現れるまで俺達は待つ事しかできない。

数分間、歯がゆい思いをして待つ。

次第に、闇は大きくなる速度を落とし、50mほどになつた所で大きくなるのを止めた。

そして、だんだん形をなして、<sup>ゲート</sup>門になつた。

「総員、攻撃開始！」 そう言おうとした時だつた。  
ゾクッ。

背筋を凄まじい悪寒がはしつた。

言い表せないような不安にかられ、命令を変更する。

「くつ、総員、攻撃に備えろ！」

「どうした、修治ー？」

俺の様子から異変を感じ取つたのだろう、リリイが声をかけてきた。

だが、俺はそれに答えるために口を開く事ができなかつた。

何か、とてつもなく強大なモノの気配を門の奥から感じ、その威圧感に体が硬直してしまっていたからだ。

ギィイイイ。

その大きさ故に、とても大きな軋む音をたてて門は開いた。

そこから魔物の大群が、という事はなかつた。

門から<sup>ゲート</sup>は、ただ一体の魔物が現れた。だがそれは、一体でも十分すぎる威圧感をはなつていた。直接だと、門越しよりもなおぞらその気配が伝わつてくる。

その魔物は、50mの門と比べてもぎりぎり通れるかといったサイズの巨体で、人型をしていた。

人型といつても、完全に人のそれではなく、シリエットは人だがよく見ると人とは違つた体の構造をしていた。

また、体の表面は黒く、固まつた溶岩のようになつていた。

頭は、目には眼球がなく、その空洞に赤い光が灯つていて、口元には猛々しい無数の牙が覗いていた。そして、鼻、耳、髪は無く、それがまた恐ろしさを増していた。

ズウウウン。

魔物が門から<sup>ゲート</sup>足を踏み出した。

そして、門から全身を出すと、この地に降り立つた宣言をするかのように、勇ましく、しかし禍々しく、吠えた。

「グワオオオオオオオオオオツツ！」

## 2人目の「将 とんでもない土産

魔物の咆哮を受け、全身が揺さぶられるように感じた。

イメージ的には、大太鼓の振動を感じるような感じだ。

そして、それを受けただけで気圧され、自然と体が強張つてきた。

こいつはマズい。<sup>アーマー</sup>何かされる前に殺さなくては。

そう思い、全身装甲を展開、巨大な魔物に突進を決行すべく魔物を見据える。

と、そこで。

門の、魔物の足元の辺りに人型のモノがいた。

巨大な魔物と違い、こちらはほぼ見た目においてはほぼ人と同じ。悪魔のような触角が頭についている、などの相違点はあれど人型だ。子供くらいの体系だが。

こいつは、恐らくスラインと同じ類のモノだ。直感的にそう思った。

ちなみに、恐らく女の子だ。胸はあまりでていないし、体のラインが分かりづらい服を着ているため分かりづらいが、こいつは女子だろう。それに、可愛い。魔族にも美少女いるんだ！と、軽く感動した。

おつといけねえ、くだらない事を観察しちまつた。

「おい、そこのお前！だれだつ！」

離れた場所にいるそいつに聞こえるように言つ。

するとそいつは、答えはせず、一歩前に歩み寄ってきた。

「やあ、初めまして」

そいつはいきなりそう言った。

「あ、ああ

敵とばかり思っていた俺は、まだ敵ではないと決ました訳ではないものの、相手が友好的な態度で話しかけてきた事に驚き、まともな返事ができなかつた。

「ボクは、逸楽のマラ。フ将の1人だよ。君の名前は？」

「富野 修治だ」

魔族か。

とりあえず素直に名乗る。

いくら相手が魔族といえ、マナーはまもらなくては。

「ふーん、富野、修治か。修治って呼ばせてもらひうね、ボクの事はマラって呼んでくれて構わないよ」

マラのその態度に少し緊張が緩みかける。

が、次の言葉で再び一気に空気が凍りついた。

「でさ、修治。スラインを殺したのつてや。ナリ、だよね？」

「つー」

俺はつい身構えて、いつでも戦闘にほいれるよひとするが

「すういよねえ。キミ、本当に人間？あの筋肉オジサン、ボクでも力押しだとかなわなかつたんだけど」

マラは相変わらず呑気に話している。  
敵意のようなものは一切感じられない。

しかし、スラインを俺が殺した事に關して何も思わないのだろうか。

彼女の口振りでは仲間だつたようだが。

それより、こいつの目的はなんだ？  
まさか、無駄話をしに来た訳ではないだろ？

「で、マラは何しに来たんだ？」

そう聞くとマラは、俺が勝手に話題を変えた事に少し不満そうだったが、答えてくれる。

「遊びに来たんだよ。でも、もつ帰ろつかなー。修治と、自己紹介程度だけど話せたし

遊びに？

それに、もう帰るのか。本当に、目的は何なんだ？

「あ、忘れてた。めんどくさいけど、大臣から言われてる事があつ

疑問に思っていると、マラが独り言を言った。

たんだつた

そして再び、俺に話しかける。

「修治、お土産があるんだ。ボクからじやないけどね。あそこの『テ  
カいの、見える?あれ、大臣からの贈り物だよ。』せいぜい楽しめ  
よ』だつて『

大臣つてだれだ。

そう思つたが、それより気になつた事があつた。

「『テカいの、つて、もしかして あれか?』

そう言つて、巨大な魔物を指差す。

今まで、存在を忘れていたが、そういうえば俺とマラが話してゐる間、  
何もしてこなかつたな。

「うん、そだよ

マジでか。  
それより

「あいつは何なんだ?』

俺のその問いに、マラは、あいつととんでもない事を答えた。

「神、だよ

神殺し 何その戦闘力！？

「へ？」

驚きのあまり、すごい間抜けな声を出してしまった。

「だつて、神だぞ、神。神つて、あれだろ、全ての中でも一番偉い奴だろ？カースト制度でいつたら頂点のやつだろ？それが土産？しかもこの場合の土産つて、爆弾渡して土産つて言うパターンの土産だよな。何それ、ありえねえって。

「まあ、神つていつもランクの低いやつだけだね。あ、でも祟り神だから戦闘力は高いかも。まあ、頑張つてたおしてね？それと、ごめんね、大臣の命令だからさ。生きてたらまた会おーね、修治」

「ちよつ、まつ

「マラの足元が光り輝く。

そして、俺の制止も間に合わず、マラは光の中へ沈んで消えていった。

そして。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ

再び動き始めた巨大な魔物  
神。

戦うべきか？

戦わなければこいつら一帯は破壊されるだろ？

まあ、幸いな事に携帯電話の電波がはいらない郊外のため、一般人の死者はないとと思うが。

そして、戦つても勝つ保証はない。むしろ勝てるかどうかわからぬ。

こいつは一回、退却すべきか。

「皆、こいつは一回退きや つて、リリイ？」

皆に退却の指示をだそつとした所で言葉を止める。

何故か。

リリイ敵神に向かつて足を踏み出したためである。

リリイは敵を見据えたまま、俺に背を向けて喋る。

「どうした、修治。今、退却とでも言おうとしたのか？」私は

戦わせてもらひや。神だと？面白。この天神殺しの刀之尾羽張 神の切れ味

を試す良い機会だ

そこで喋るのを止め、今度はこいつらを振り返り返り言う。

「それに、修治の障壁なら、あんな神程度の攻撃など効かん

だろ？」

「あ、ああ

そんな返事しかできなかつた。

リリイが大きく見えた。

神を“神程度”扱いとはね。

かなわないな。

リリイは、強い。

戦闘力的な意味でもそつだが、そつではなくて、何かリリイ自身の本質的な所に強さを感じた。

「俺も、負けてらんねえな」

俺も、戦おう。

「リリイー！とりあえず俺が神の氣を引く。そしたらリリイが切りかかってくれ！」

「ああ、まかせろー！」

俺は神に向かつてダッシュを決行する。神との距離は150mほど。

その距離を魔力補強した脚力で駆け抜ける。

「グルア？」

神が俺を見た。

よし、とりあえず興味は引けた。

残りの距離も一気に詰める。そんな意氣込みでダッシュの速度を上げた、その時。

グワッ、と神の口が開いた。

ズツ

「プロテクトツ！」

ガアアアアアアツ！

口が開いた、そう思つた次の瞬間。神の口から莫大なエネルギー量の熱線が迸つた。

防げたのはほぼ反射的にだつた。とつさに発声してのプロテクト展開で熱線を受けた。

神の熱線は凄まじいものだつた。

辺り一面が、焼きの原どころか消し飛んでいた。

そこらにあつた物は全て、燃える前に溶けてプラズマ化した。地面は抉れてクレーターのようになつていた。

俺の障壁は無事だつた。

というか、無傷だつた。

少し、誇らしい。

まあ、天之尾羽張アメノオハリノカミ 神の斬撃が効かなかつた時点でまず大丈夫なのだろうが。

そして、そんな破壊を引き起こした神は少しの硬直を余儀無くされていて。

また、溶岩でできたようなその体は、自らの熱線で少し柔らかくなつていた。

その中で一番柔らかくなつていたのが、体の方から口へエネルギーを運ぶ際に通る、

喉だ。

そしてそこは、人体の急所である、首でもある。

「リリイ！」

「まかせろ！」

その、がら空きの首元へ、瞬間移動したリリイアメノオハバリノカミが天之尾羽張テレポート神を叩き込む。

と、そこで、神が急に動いた。

左腕でその斬撃をうけ、体は後ろに逃がす。

呆氣なく切り裂かれ、ボトッ、と音をたてて神の腕が落ちる。が、腕を切り落とした本人の顔は驚愕と焦りに染まっていた。切り落とされた神が、ニヤツと笑つた気がした。

宙に投げ出された状態のリリイは、即座に瞬間移動をしようとした。

リリイの姿がかき消え　　る前に、神の右腕が振り抜かれた。そして、リリイが吹き飛ばされた。

俺はリリイに叫んだ。

「リリイ、今だーどつかに移動しろッ！」

吹き飛ばされたおかげで、神からの距離は離れた。だから、今ならもつと遠くへ逃げられる。そう思つたのだが

「リリイ？　おい、リリイー早く逃げろッ！」

リリイは動かなかつた。

吹き飛ばされた先でぐたりとしている。

まさか、気絶したのか？

死んではいない。それは魔力でわかる。

ドラ○ンボールの主人公風に言うと「まだ気がきえてねえ」といつた所だ。

無情にも、神はぐつたりとして動かないリリイの元へ急速に近づいて、その右腕を振り上げた。

間に合わない。

ここからでは着く前に振り下ろされる。だが、諦める訳にはいかない。

俺はリリイの元へと全力で突っ込んだ。

しかし、神の右腕は無慈悲に、俺が着くより早く、リリイに向かつて振り下ろされた。

凄惨な光景を予想し、そうならぬよう、悪あがきの全力ダッシュをする。

しかし、間に合わない。

神の右腕がリリイに当たる、そう思った瞬間。

スパスパッと、心地よい音をたてて神の右腕が切り刻まれた。

「え？」

一瞬、リリイかと思った。

しかし、リリイは今も気絶している。

リリイではない。

では、誰？

そう思つてゐると、リリイの人の少女の存在に気がついた。

誰だ? と思い、また、啞然としながら見ていると、少女は無造作に手を薙いだ。

କବିତା

スパスパスパスパスパスパスパススパツ。

先ほどの右腕のようにして、神の全身が切り刻まれた。  
ぶつ切りになつた神の肉塊からは血のように溶けた溶岩がながれ  
でた。

神が、ほんの数秒で殺された。

この子は何者だ？

毒は毒をもつて 神は神をもつて?

「この子は何者だ?」

そんな単純な疑問一つが頭の中を占める。

そして、茫然としながら、なんとなく少女の様子を観察する。腰くらいまでの黒髪で、美少女の部類に入る顔の造形だ。そして、どこか独特の顔立ちだった。卑弥呼の時代、もしくはもっと昔の日本といったかんじだ。

服装も昔の人の着るようなもので、古墳から出土するような装飾品を身につけていた。

俺が眺めていると、少女は気絶したリリイの側で膝をついてしづがみ、リリイを揺すり、話しかけた。

「主。起きて下さい、主」

「主?」  
リリイが?

疑問に思つてゐるヒリイが意識を取り戻した。

「ううん。 なん? 何だ?」

どうやら、状況が理解できていないようだ。  
駆け寄つて話しかける。

「田、覚めたみたいだな。ほら、さつさまで神と戦闘してただろ、  
思い出せって」

「神？ はつ一や、奴はどいつなつた！？私は何故無事なんだ！？」

ミスつた。

いきなり思い出せんのはやつぱり混乱しちまつた。

「神は死んだよ。やこの子が殺したんだけど リリイの知り合い？リリイのこと主とか呼んでたけど」

俺がやつぱりと、ようやく自分の側にいる少女に気づいたようだ。  
そして、口を開いた。

「 貴方は、誰だ？」

はい？

知り合いでないんですか、リリイさん。

では、その方はだれですか？

俺にはさっぱり、心当たりがございませんが。

「 うーん、この姿じゃ分からぬですかな。

そうだ！」

あ、

正体不明の少女は、何やら咳いて閃いていた。  
何を閃いたんだ？

「 主、見て下さーっ！」

少女はそう言つと、少し駆けて俺達から距離をとつた。  
そして、スパスパスパツと近くの地面を切り刻んだ。

何やつてんの、あの子？  
あんなんで誰かなんて分かるわけ

「むつ、その切れ味は天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神か？」

え？

なんか分かってる！！

というか、何？天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神つてどうこいつ事？

「はー…よつやく氣づきましたね」

「すまない、見た目が違いますぎて氣づかなかつた」

「いえ、氣づいてくれただけで嬉しいです！」

「そうか。ならいいな、はつはつ」

しかも、なんか普通に会話してゐし。  
うーん、事情が分からん。

「あー、お取り込み中悪いんだけど」

話しかける。

やはり、分からぬ時は聞くのが一番だな。

「なんですか？」

少女が普通に反応してくれたので、そのまま質問する事にする。

「君が天之尾羽張 神つて、どういう事?」

「え? そのままの意味ですけど」

「当然だ、みたいな、この人何言つてるの、みたいな調子で返された。

「え? 僕が間違つてるの?」

「で、でも、それつて刀の事だよね。君は刀じゃないけど」

「あ、そういう事ですか!」

「俺が聞くと、今度は何か納得したようだ。  
そして、そのまま説明を始める。

「確かに、天之尾羽張 神は刀です。ですが、神の名でもあるのです」

「どういう事だ?」

「神の名?」

「ええ」

「俺がオウム返しに聞くと、頷いて説明を続ける。

「その刀を天照大神<sup>アマテラスオオミカミ</sup>が食べて産んだ神。それが天之尾羽張<sup>アメノオハバリノカミ</sup>神、私はです。ですから、まあ、天照大神<sup>アマテラスオオミカミ</sup>の直系の神となるので、あの程度の神なら簡単に殺せます。それに私、神殺しの刀ですし」

「は、はあ。そつなか」

話が突拍子も無さ過ぎた。

つていうか、敵として神がでてきたと思つたら今度は味方かよつ！

「そういう訳で、私には刀と人型の神の2つの形態があります。先ほどは主の身に危険が迫っていたので形態を変えてお助けしました」

そうだったのか。

「どうか、リリイを主つて呼んでたのはリリイの刀だったからなんだな。

その後、一旦GSSC本部へ戻つて（敵の）神の事や（味方の）神の事について話し合ひ「こととなつた。

道中で そんな呪文ってアリ? (前書き)

短いですが、なんとか投稿。

道中で そんな告白ってアリ！？

アメノオハバリノカミ  
天之尾羽張 神の説明が終わった後、手つ取り早く門をぶつ壊してGSSC本部へ向かつた。

「リリイがGSSC本部ですね。刀の時も何度も来ましたが、自分で立つて見るとまた違つて見えますね」

そんな事を呑気に言つ少女に、少し疑問が湧いた。

「刀の時もちゃんと意識はあつたのか？」

「それは勿論あつましたよ。でなければ、主を主と認識できませんでした」

それもやうか。

ところで

「リリイがお前で俺を斬った時の事も覚えてる？」

凄く気になる。

人を斬る時の刀つてどう感じてるんだ？

まあ、俺としては特にちゃんとした解答は期待しないが。

「修治さんを斬った時ですね。」

その時は最高でしたっ！私、感動しましたーあそこまで斬り心地の良い人は初めてですー」

は？

えええええつ！

何ソレ！？

斬り心地つてなんスかつ！？

見ると、天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神が、両目を爛々と輝かせていた。

怖つ！

軽く恐怖におののいていると、天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神は更に驚く行動に  
でた。

俺に近づき、頬を染め、キラキラ（ギラギラ？）した上田遣いで

「その、毎日私に斬られて下さっこつ！」

プロポーズ  
告白？をしてきた。

「いやだ」

即答する。

イエスなんて答えたら、それこそ命の危機だぞ？

「な、なんですかっ！」

いや、なんでといわれてもねえ。  
死にたくないし。

つつうか、何？毎日私に斬られて下さい、って。毎日味噌汁を作

る、の亞種か？

「まあ、いいです。でも、あきらめませんよ？」

天之尾羽張 アメノオハバリノカミ 神は、そう布告してきた。

ああ、普通のシチュエーションで普通の娘にいわれてえ！  
そういうや、俺の周りに普通の娘なんかいるか？

そう思って見回すと  
いなかつた。1人も。

はあ、と溜め息をつきながらそのままみんなを見ていると、ある  
事に気がついた。

あれ？皆さん若干引いてる？

そう、非常に個性的かつ非常識的存在のAIDIHO部隊員達でさ  
え、天之尾羽張 アメノオハバリノカミ 神に引いていた。

恐るべし、天之尾羽張 アメノオハバリノカミ 神。

そんなこんなで話しながら歩いているうちに、AIDIHO作戦会  
議室に着いた。

この部屋はAIDIHOが結成した時に設けられた部屋で、作戦会  
議以外にも俺達の活動の拠点となっている。

「隊長は来ていないな」

リリイが言った。

実は、先ほど連絡をとつ、隊長さんも「」の部屋に呼んで会議をする事になつていて。

隊長を自分たちの所に来させるのもどうかと思つたが、隊長さんが「君達の所でやらせてもらいたいな。」実は、僕の部屋が散らかつていてね。足の踏み場もないんだよ」と言つたので、「」でやることになつた。

さて、後は隊長さんが来るのを待つだけだな。

## クリスマス with 光（前書き）

PV 超えました！

皆さんありがとうございます！

そして、今日はクリスマスイヴ。

という訳で、光の出番を増やす目的もあり、修治の過去話 with 光クリスマスイヴ編です。

どうぞ！

## クリスマス with 光

隊長さんはなかなか来なかつた。

40分程たつた所で、皆暇を持て余してソワソワしだしていた。  
俺は慣れているから平氣だ。

俺は人を待つのは嫌いだ。

だが、待たせる方が嫌いなので、いつも待つ側だ。  
小、中学生の頃は何度も光に待たされた。

そういえば、去年の中學最後のクリスマスも、光にずいぶん待た  
された覚えがある。  
あの時は確か

プルルルルルルルル。

机の上に置いてあつた携帯電話が鳴つた。

もう寝よつと想えていた俺は、めんどくせこなー、と思つて携帯電話を手に取つた。

着信：f r o m 朝霧 光

画面に表示された相手の名前を見て、正直、うわー、と思つた。何故か。めんどくさいからである。

光のやつ、俺にやけにからりとでくるし、こつも最後はめんどくさい事になるからな。

それにいつも、自分から誘つておいて遅れるし。

じりばっくれよつか、そんな考えが頭をよぎつたが

「はい、もしもし」

やはり、明日学校で怒られる事を考へて無視する事はできない臆病な俺だった。

「あ、もしもし修治。明日暇？遊ぼ？」

電話にでると、いきなり本題を言つてきた。

まあ、これも慣れてるからどうといつ事はないんだが。

「何で？」

光のやる事は、大抵の場合はまともな理由なんて無い。だが、聞くことで損はしないので聞いておく。

「何いつてるの？明日はクリスマスイヴじゃない！」

そう、明日はクリスマスイヴだ。

だが、街に出てそこかしこにいるリア充を見るのが嫌な為、明日は家に籠もると決めているのだ。

いつも、行事の際は家に籠もろうとするのだが、その度に光に引つ張り出される。

いつだか、祭りの時に光に引きずられて外へ行った時には、光と歩いていたらクラスメイトの太郎君に会って、「街中、リア充ばかりで嫌になるよ」と言つたら、「お前が言つた、死ね」と言われた事もある。

俺が何かしたか？

だから、俺はそういうデカい行事は嫌いなのだ。

という訳で、

「行きたくない」

「なんですよー。どうせ用事は無いんでしょう？なら私と

「だが断るッ！」

俺は、俺は

、  
家に引きこもりたいんだああああ！

が、俺の決意を上回る切り札を、光は用意していた。

「ふふっ、そりゃうと思つた。けどね、私はあんたのお母さんに修治をよろこべつて言われてるのよー。どう? これには逆らえないわよね?」

「あい、つざいん。

降参です。

母親とか、卑怯だろ。

ちくしょう、そんな隠し玉を持つてやがったか。

光はやけに俺の母親と仲がいい。

今回もどうせグルなんだろ?。

はあ。

と、溜め息をつきながら返事を返す。

「わかった。行くよ」

「む、なんか嫌そうね。 まあいいわ。じゃ、明日は七幡神社に6時待ち合わせつて事で。また明日」

「ああ、また明日」

ピッ、ツー、ツー、ツー、ツー。

通話が切れた。

ちなみに、俺は通話を切る時、相手が切るのを待つタイプだ。自分からは切らない。

翌日。

寝起きは最悪だった。

なんせ、毎々しいクリスマスイヴだからな。

ハツ当たりか？

そして、だらだらと過ぎます。

6時になつたら外出なので、今のうちに急げておかねば。ハローハ

ロー。

時間は過ぎてゆく。

昼になり、2時、3時、4時、5時。

そして、5時半になつたので家をでた。

約束の神社に着くと、5時50分頃だった。  
丁度いい時間だ。

俺は光を待つ事にした。

しかし、

「 来ないな

約束の6時を過ぎ、6時10分になつても来る気配がなかつた。

なので、ひたすら待つ。

暇なので、なんの気なしに神社を眺める。

神社は今日もやつていて、神主さんや巫女さんが何かやつていた。

キリスト教の行事の田に頑張るねえ。

待つ。

そして、神社を眺めるのも飽きてきた頃に光はやって来た。  
時刻は6時30分。

まあ、30分くらい待つてやつてもいいのだが、今日は光が無理  
やり俺を呼び出した訳だし、少々気に食わない。

「じめん、遅れた！」

「理由は？」

少し意地悪かもしけないが、理由を聞く。

というか、今の俺には聞く権利があると思う。

「何を着ていくか迷つて。　　べ、別に、修治と行くから気合いで  
を入れた訳じやないんだからねつ！勘違いしないでよねつ！」

なんだつけて、ツンなんとか、つていつ性格のアニメのキャラかな  
んかがこれとおんなじような喋り方してた気がする。

というか、服決めるのに時間かけてたのか。

そういう所はやっぱり女の子か。

それに、改めて見ると可愛い。

可愛らしい服を着ていたのもそうだが、普段幼なじみって事であり意識していなかつたが光は実はかなり可愛いかった。

そんな事を考えてしまつたせいで、もう怒る氣にもならなかつた。

「そつか。じゃあ、もう行くか」

「うん」

向かつた先はイルミネーションで有名な所だ。

「  
綺麗」

「ああ、綺麗だな」

そこは、辺り一面イルミネーションで、無数のLED電球がとても幻想的な空間を作り出していた。

それはまさに、光の芸術といった所で、思わず息をのむほど美しい光景だつた。

木々は光の花を咲かせ、植えこみの地面に敷かれた蒼い電球の光は海のように輝いていた。

電球に覆われた光のトンネルは、その先に幻想郷が広がっているのではないかと思わせるほど眩く光り輝いていた。

俺と光は、しばりくわの美しさに感動しながらイルミネーションを見てまわった。

そして、時間がたつのは早く、すぐには8時になつた。

「 もうじき帰るか」

「わかつた、本当はもう少しここに留たいけど、そうね、帰る」

そして、あつあつと歸つておしまい、そう思つた時だつた。

「 わつ、 もやー。」

ばたん、グキッ！

光がこけた。

恐らく暗闇で足元まではよく見えなかつたのだろう。

それにしても、グキッて音、しなかつたか？

恐る恐る光に聞く。

「 捻つた？」

「 うん、 そうみたい」

少しの沈黙の後、光は答えた。

「 ううがないな。

光の前に行き、背中を向けてしゃがむ。

「乗れよ、背負つてやる」

「え、でも 家まで結構距離あるわよ?」

俺の言葉に、珍しく遠慮する光。

「大丈夫だ!クリスマスサービスだよ!  
あーもう、乗らないんだつたらつ!」

地面に座り込んでいる光をお姫様抱っこの容量で抱き上げる。

「え、あ、ちょっと!」

光が顔を真っ赤にして慌てるが取り合わない。  
最初っから、素直に背負われておけばよかったのに。

「うひして、俺は光を抱っこして家へと向かった。

その途中。

「な、こんな事になるんなら来ない方が良かつたら?家で『ロロロロ  
してるのが一番だ』  
と、光をからかつてみた。

すると。

「いいじゃない、私は楽しかったわよ。イルミネーション綺麗だつたし。捻挫もしたけど、

……そのお陰であんたに抱つこしてもいいだし……

「え？ なんつった？」

最後から辺が聞き取れなかつたのでもう一度聞くと、

「何でもないっ！」

バシッ。

なんか殴られた。

そして、俺達は帰路を辿る。

まあ、俺もそこそこ楽しかった。

そんな思い出だ。

## クリスマス with 光（後書き）

クリスマス企画といつ事で、サイドストーリー的な、過去話です。

読まなくとも今後のストーリーには全く影響しません。

この話で光が修治に惚れたといつ訳でもあります。この話の時  
点では既に惚れています。

まあ、そんな訳で、本当にサイドストーリーですが、読んで頂ける  
と幸いです。

……あとがきにいつ書くのは卑怯かな？

2度目の呪付け 僕にネーニングセンスはないの

「 で、その娘は誰だい？」

部屋に入つてくるなり隊長さんは言った。

「あ、はじめまして。私、天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神とお呼びます」

「アメノ オハバリノカミさん?ええと、今回の件の関係者?」

そういえば隊長さんは「将が出た事と敵の神の事しか報告してなかつたな。

と、いう訳です」

隊長さんに今回の事について一通りの説明を施した。

「 そりが、そんな事が 」

聞き終わった隊長さんは、今聞いた内容を整理するためコーヒーを一口飲んでから眉間を揉んで考え方をはじめた。

皆が静かに隊長さんの言葉を待つ。

そして、隊長さんは言つた。

「天之尾羽張 神

つて名前

長くない？」

駄目だこの人。

真面目に会議しようつて時にこの発言するか、普通。

「それでは、どうしたいんですか？」

あくまで冷静に、隊長さんに質問する。

「やつだねえ。 修治君が一ックネームを考えればいいんじやないかな？」

人任せつー？

「なんで俺が！」

「いや、だつてナナ君の名前つけたのも君だし」

理不尽だッ！

「私も修治さんに名前を付けて頂きたいですーむしり一ックネームじゃなくて名前でいいですー！」

追い討ちつー！？

「 分かったよ。やればいいんだろ、やれば

無駄なのは分かっているので、抵抗はせずに命令をアクセプトする。

「よろしくお願ひしますっ！」

天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神は、そういつと期待に満ちたキラキラした目で見つめてくる。

それはつまり 今この場で考えると、そういう事か？  
俺は、家に帰つてゆつくり考えよつと思つていたんだが。

うーん、どんなのが良いだらつか。

「えーと、苗字は ？」

「 貴方の苗字を下さー」

〔冗談で言つてるのかと思い、天之尾羽張アメノオハバリノカミ 神を見る。

しかし。

マジだこいつ。

本気の目をしている。

でも何故か、斬らせて下すこと言つてきた時のよつな狂氣が混ざつていた。

だから俺は

「天野、なんてどうだ？」

あえて無視した。

だって、嫌だよ、毎日斬られるなんて。

鬼嫁どころか殺人鬼嫁だよ。

「もじつただけですね」

つるさい！不満なら自分で考えろ！

「けど、修治さんがつけてくれたので嬉しいです。将来、『『宮野』』になるまで使います

諦めろ、それは。

さて、苗字はそれで決まりだな。  
名前は 、

「トツカなんてどうだ？十柄の剣だから」

「いいですね。漢字は、そうですね、嫁ぐの嫁に神で嫁神なんていっていいのでしょうか？」

じんな名前だよ、それ。

「ええつと、なんでそれにしたんだ?」

一応、聞いてみる。

「聞いてしまいます？ その、修治さんに嫁ぐ神つて、いつ思ってこ  
をこめて考えたんです。どう、ですか？」

いや、だから。

どうですか?と聞かれても困るんだが。

「まあ、いいんじゃないの?」

「本当にですか?一じゃあ、私と結婚してくれるといつ」と  
「それはない」

しつかつと否定しておへ。

それにしても、じつ、真面目に俺と結婚したいらしいが  
やはり、理由がな。

こんなに美少女だし、普通に告白されたら普通にOKするんだが。  
理由が斬り心地ではな。

さて、兎も角、これで名前は決定した。

「隊長。じつこの名前、天野 嫁神で決定しました」

報告する。

すると隊長さんは、うむ、と頷いた。

「やうか。じゃあ、天野君。GURUJIN、もつと並べばAHORI  
に入ってくれるかな?」

ずいぶんと急な申し出だな。

まあ、俺としては予想してた事だが。

対する嫁神は。

「そうですね。そうすれば、主達と同じ土俵に立てますし」

同じ土俵？

「どうこうことだ？」

聞くと、嫁神は答えようとした。

「あれ？ 気づいてませんか？ 刀の頃、ずっと様子を見させて頂いて気づいたのですが、皆さん修治さんの事が むぐう。ふごふごつー（ビ suff ）ぐたり」

答えようとしたが、何かを言つ途中で他のメンバーに口を塞がれ、それでも喋りうとした所、殴られて氣絶した。

「皆、どうしたんだ？」

『何でもないよ』

尋ねると、皆揃つて笑顔で答えてきた。

これ以上の詮索は避けた方が良さそうだ。

それと、氣絶しちゃつたけど、ここに起きた方がいいよな？

「おーい、嫁神。起きるー！」

嫁神の体を揺すつて呼びかける。

「ううん、ん？修治さん、おせよハジります。寝込みを襲つてたんですか？」つ、続き、ビリビリ

あ、

「いつ、寝起きにいきなり何いつてんだ？」

「田え覚ませ」

「へへ、私たちちゃんと起きてしま (うつら) いたつー」

一発殴つておく。

「わー、修治さん酷いです。ディーブイですー。」

何が家庭内暴力だ。

どこにも家庭内の要素がないぞ。

「鬼も角、AIDISHに入るのかい？」

あ、煮えを切らした隊長さんが嫁神に尋ねた。

あの隊長さんのペースを乱すとは、なかなかの強者だな。

「はー、よろしくお願ひしますつー。」

嫁神は元気よく答えた。

天野 + 1名  
嫁神トツカ  
AIDIUメンバー

## 談話 質問してみよう

「で、神とやり合ってなんだけど」

天野 嫁神の話が終わり、隊長さんが本題を切り出した。

「フ将と同じで前例が無いんだよね。でもまあ、一つ分かる事はある。それはここいら一帯が目をつけられたって事だ。修治君がスラインというフ将を殺した事と、今回の神の事で、確実に目をつけられた筈だよ」

「田をついたりれたって、やつぱり 魔族ですか？」

「ああ、そうだね」

俺の質問に答え、少し考えるよつとする隊長さん。

そして、いつもより気難しげな、隊長さんには似合わない表情で告げた。

「これ以上は、僕らの独断で行動する訳にはいかないな。総本部に連絡をとりやつ」

隊長さんの言つた事の中に、聞いた事のない単語が混じついていた。総本部つて何だ？

「なんですか、総本部つて」

「IJOが日本支部本部とするど、世界中のGUNGEI全ての総本山、一番上の本部かな」

まう。

。

マジで？

「僕が連絡をとつて判断を印ぐよ。ちょっと遅すぎたかもしないけどね。まあ、GURUSHIって、基本的に放任主義でいつもは各支部それぞれが独断で運営しているからじょりがなにかもしれないけど」

だから、と隊長さんは話を続ける。

「君じはまじまらへ休養と訓練をしてくればいいよ。じゃ、解散

「

隊長さんの宣言で、会議はお開きとなつた。

「じゃ、僕は今言つた仕事の関係でかえるよ

」

そうしてしまく、皆動かずじつとしていた。

なんか話題をふらねば。

「嫁神、改めてGURUSHIおよびAIDAIメンバー入りおめでといつ

もういつも訳で、嫁神に話題をふつてみた。

皆、俺につられてそれぞれに嫁神におめでとつと顔をかける。

「へ？ あ、ありがとうございます」

いきなり話題をふられた嫁神は少し驚いたが、しつかりお礼を返した。

すると、リリイが何かを思い出したかのよつに言った。

「そうだ、嫁神に聞かねばならぬ事があるので」

「何ですか？」

「いや、嫁神は魔力を持つているのか気になつてな。私が振るわんでも、自力で軽々と魔物 どころか、神を斬つていただろう？」  
「そういや、そうだつたな。  
確かに気になる。

リリイの言葉に好奇心が刺激され、嫁神の解答を待つて嫁神を注視する。

周りを見ると、俺だけではないようで、皆、嫁神に注目していた。ナナでさえも嫁神の方を興味ありげに見ていた。

「み、皆さんどうしたんですか、そんなに私をガン見して。  
はつ！修治さんも私を見ています！そんな、そんなに熱い目でみな  
いでえ！」

なんか一人で悶えはじめた。

いいから早くリリイの質問に答えてくれよ。

「ンンッ！」

リリイが咳払いをする。

「はっ…そうでした。魔力があるかないかでしたね。勿論あります  
よ」

やはり主には逆らえないのか、咳払い一つで元に戻って質問に答えた。

「どうか、魔力持ってるのか。」

それにして強かつたな、神を簡単に切り刻んで。

「と、そこで、この機会に以前からの疑問について尋ねてみよ」と思い立った。

「なあ、ところで何で魔力があると魔物に攻撃がきくんだ?」

「どう聞くと、リリイが返事をした。」

「そうだな。この際だから魔力などについて詳しい説明をしておくか。まあ、今更かもしれないがな。修治は能力だけで強いから特に説明はいらないと思ったんだが、知つておいて損はないしな」

「そして、光とナナも。」

「私も説明するわ」

「某もします」

「嫁神は。」

「私は聞く側ですね」

そして平井さん。

「私も聞いてるよー。説明は大変そうだし」

ひつして、（学生らしからぬ謎の）勉強会が開催される事となつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5528y/>

---

GATE

2011年12月27日02時00分発行